

60316

教科書文庫

6
810
34-1950
01304
49758

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

8 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

文部省検定済教科書

2	小国416
東書	



TIA7
1LO
2

柳田国男編  
新小国語

四年下

中央図書館

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449758

昭和二十五年八月十二日 文部省検定済  
小学校 国語科 用

新しい国語

四年下

広島大学図書  
0130449758




東京書籍株式会社

広島大学図書  
0130449758





もくろく

一	運動会……………四
	(一) 百メートル競走
	(二) オズわり
	(三) ダンス
二	秋の歌……………十三
	(一) 秋
	(二) 野を歩けば
三	学級新聞を作ろう……………十八
四	学芸会の日……………三十
	(一) りこうなやくそく
	(二) ありの研究
	(三) コップ遊び
五	汽車……………五十



六	放送を聞く……………七十二
	(一) 鉄の馬
	(二) 駅長さんの話
七	動物の話……………百五
	(一) 動物をつかまえる話
	(二) いろいろな動物
	わに だちょう ころしゅう
	じょう おっとせい 犬
八	ピノチオ……………百二十四
	ふろく 新しく出た漢字……………百五十一
	勉強の手引……………百五十二



一 運動会

(一) 百メートル競走



三年生の旗取り競走がすんで、いよいよぼくたちの百メートル競走になった。むねがどきどきする。

ぼくたち七人は、静かにスタートラインにならんだ。

「用意。」

と、先生の声。

「ドン。」

ぼくはまっ先に飛び出した。

半分ぐらいの所まで来た。後の人たちもいっしょうけんめい走っているらしい。

「しっかり。」

「早く、早く。」

応えんの声がごちゃごちゃになって聞える。

おかあさんのいる所にさしかかった。おかあさんは運動会の前の日に、

「はるおが走って、もう少しで追いぬかれそうになったら、はるおしっかりと言うよ。」

と言っていた。でも何も言っているようすはない。だいいじょうぶだと思ひながら、さいごの馬力をかけた。ゴールにはられた白いテープまでもうすぐだ。やっどゴールへ飛びこんだ。ぼくは一等になれたので、とてもうれしかった。

(二) すずわり

「ドン。」

という音といっしょに、二年生のすずわり競争が始まった。すずわりというのは、長いぼうの上の方にぶらさげた相手の

組のすずに、玉をぶつけて、それをこわすのである。

赤組は白のすずを、白組は赤のすずをめぐがけてかけ出した。あたりから、

「赤、しっかり。」

「白、しっかり。」

という、元気な応えんの声わきあがってきた。私も負けずに、せいっぱいの声で応えんした。

ボン、ボン、ボンと、玉がしきりに空に飛ぶ。けれども、みんな、上に行ったり、横にそれたり、届かなかったりして、なかなかうまく当たらない。

「あつ、当たった。」

赤組の投げる玉が、一つ、二つ、白組のすずびに当たったが、まだすずびはわれない。

急にばらばらばらと、こまかい色紙の落ちるのが見えたと思つたら、こんどは、きれいな色紙ざいくが一面にふつてきた。白組のすずびがわれたのだ。

「わあっ。」



と、うれしそうな声がわき起つた。みんな、ゆかいそうな顔をしている。ちらちらと風にふかれて、遠くへまわっていく色紙をながめながら、私もほんとうに楽しい気持ちになった。

### (三) ダンス

こんどは六年生女子の、野ぎくというダンスである。音楽に合わせて、運動場へ二列にならんではいつて来た。白いシャツと黒いスカート、みんな、おそろいのかっこうをしている。その黒いスカートが、足の動いたびに同じようにゆれて、とてもきれいだ。

運動場のまん中まで進むと、右の列は右へ、左の列は左へ、

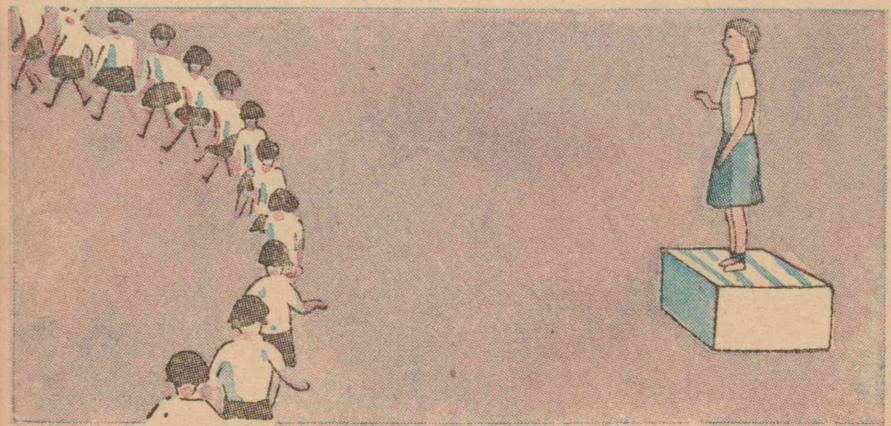
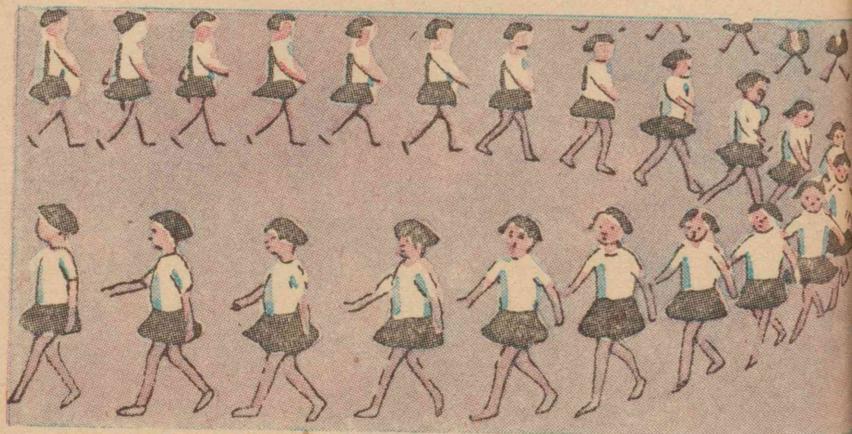
両方に分かれて、それぞれまわく回り始めた。はじめに、左の列が一つ円を作った。するとこんどは、右の列がその円の外側を回って、また、一つ円を作った。きれいな二重まるが、運動場のまん中にでき上がって、行進曲は終わった。

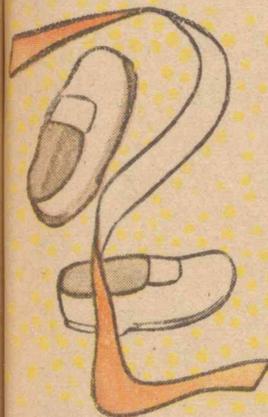
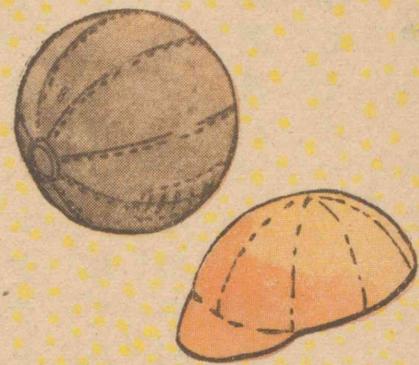
間もなく、野ぎくの曲が始まり、台の上に立った先生の右手がさつと上がると、大小二つの円はゆるやかに動き出した。速く、おそく、いっしょにな

ったり、何人がずつはなれたりしておどっている。おそろいのスカートが風にゆれる。

いつの間に出したのか、外の円の人も、中の円の人も、みんな、かた手にまっ白なハンケチを持っている。それがおどりにつれてひらひらする。見ていると、むねの中がすうつとするように気持がよい。おどっている人たちも楽しそうだ。

ああ、きれいだ、すばらしいな、と





思っているうちに、ダンスは終ってしまった。

二つの円はさつととけた。そして四列にならぶと、こんどはかけ足で運動場から出ていった。

私はなんだか残りおしいような気がした。思わず、ため息をついてしまったが、まわりのはく手の音にはつとして、私も手がいたくなるほどたたいた。

## 二 秋の歌

### (一) 秋

町のなみ木に

秋が来たよ。

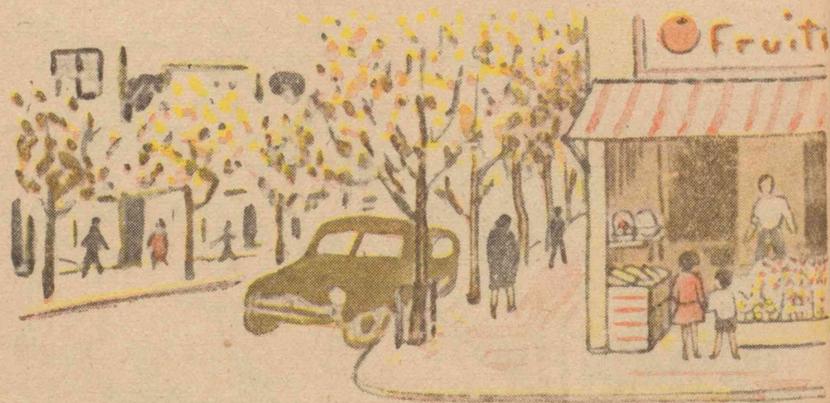
百貨店のかざりまどに

秋が来たよ。

くだもの屋の日よけにも

秋が来たよ。

りんごを買う子供の顔にも



秋が来たよ。

かげの深い午後の町かどで、  
黄いろいいちよりの落葉が  
わたしたちのかたにまってくる。  
どこからか  
電車のひびきが聞えてくる。

夕ぐれになって  
ひがともると、  
へやの中にも

秋がやって来るよ。  
わたしのつくえの  
スタンドの光も、  
まるくまるく  
すんでくるよ。





音して光って、  
 はたおりは飛び立った。  
 ききよりの花を  
 つんで行こう。  
 おみなえしの花を  
 たおって行こう。  
 すすきのほを  
 めいて帰ろう。  
 こんばんはお月見だ。



(二) 野を歩けば  
 うっすらと動かない雲、  
 高い高いうろこ雲  
 ああ、空は水のようにだ。  
 野を歩けば、  
 草にも日にも  
 さやかな秋のにおいがする。  
 きらきらと



### 三 学級新聞を作ろう

ぼくたちの組では、今まで一週間に一度、学級かべ新聞を発行していました。これは五つのはんが、かわるがわる当番になって、そのはんの人たちがくふうして作っていたのです。それで、新聞の大きさもまちまちですし、新聞の名前も一ばんは「なかよし新聞」、二はんは「青空新聞」、三ばんは「子供新聞」など、いろいろです。書いてあることも、書き方もちがっていました。

今週は五はんが当番で、きょう、その発表がありました。

五はんの「ひなどり新聞」は、スポーツのことや、学校のことや、それから、などなど、詩、物語、絵などもあつて、たいへんよくできていました。

発表が終つてから、先生が、六年生の作った「朝風新聞」というのを持ってこられて、それを見せてくださいました。あまりよくできているので、みんな、びっくりしてしまいました。先生は、

「どうです、みなさん。私たちの組でも、各はんばらばらのものを作らないで、まとまったものを作ったら……」とおっしゃいました。

前からそうしようと思つていたところなので、みんな 賛

成して、午後、相談することになりました。

ぼくが話し合いの進行がかりをしました。昼休みの時に、

相談する事がらをだいたい考えてお

きました。「新聞の名前を何とするか。

「大きさ」「書く事がらとその分量」「だ

れが書くか」「何日おきぐらいに発行

するか。

みんなに、きょうの相談の順序を

決めてもらいました。一番はじめに、

新聞の名前を決めることになりました

が、なかなか決まりませんでした。



みんな、思い思いの名前を言い出して、黒板に書ききれな

いほどでした。一番あとで、五はんの小山さんが、

『小ばと新聞』にしたいと思います。

と言いました。川村さんが、

「なぜですか。」

と聞きますと、小山さんが、

「はとはやさしい鳥です。それに、私たちはまだ子供ですか

ら、小ばとということにしたのです。」

と言いました。

「それから 伝書ばとは遠くからのたよりを運んでくれるで

しょう。新聞もニュースを知らせるものでしょう。だから

「小ばと新聞」にぼくは賛成だ。

と、となりですわっていた平野君が言いました。

ぼくはたくさんのお名前の中で、「青空新聞」、「なかよし新聞」、「子供新聞」、それから小山さんの「小ばと新聞」がよいと思いましたが、この四つの中から選ぶようにしたらどうかと、みんなに相談しました。みんなが賛成したので、その中から、めいめい自分がよいと思う名前に手を上げることになりました。「青空新聞」が九人、「なかよし新聞」が四人、「子供新聞」がふたり、残りの二十九人が「小ばと新聞」でした。先生に相談して「小ばと新聞」に決めました。次に大きさは、わら半紙を八まいつないだ大きさにすることにしました。

「新聞の役目はニュースを知らせることです。」

と、竹中君が言ったので、ニュースをたくさん書くことにしました。山川さんは、

「私たちにかけいのある記事をたくさん入れてください。」  
という、注文を出しました。男の子が、野球やほかのスポーツの記事がほしいと言うので、これものせることにしました。小山さんが、自治会のことや、学芸会やてんらん会のことを書く方がよい、と言いました。それで、ニュースらん、自治会のらん、学芸会らんと大きく分けて、「声」のらんや、質問のらんも作り、一週間に一回、各はんが交代に当番になって、発行することになりました。村田さんが、新聞はんを作ったら

どうですか、という意見を出しましたが、このまま続けることになりました。

こうして、ぼくたちの組の「小ばと新聞」が生まれました。第一号は、一ばんが作ることにしました。どんなものができるでしょう。

ニュースらんを受け持つぼくたちは、いつも手ちようどえんびつを、ポケットに入れておくことにしました。

きょうは校内のニュースを書くので、ぼくは休み時間でも、みんなと遊ばないで、学校じゆうを見て歩きました。すると同じはんの山中君と小山さんにばったり会いました。

「君たちは、何か見つけたかい。」

「うん、三年生がね、ろうかをかけていて、かいだんの近くの曲がりかどでしようどつしたのだよ。」

「それがたいへんなのよ。かんご婦さんの話では、かた方の子は足にけがをしたのですって。あぶないことね。さっそく新聞に出そうと思ってるの。」

ぼくは山中君たちと別れて、職員室の前へ行きました。おりよく前田先生がみえたので、ぼくは急いで聞きました。

「先生、この間、校内野球リーグ戦があると聞いたのですが、いつごろから始まりますか。」

「来週の月曜日からだ。」

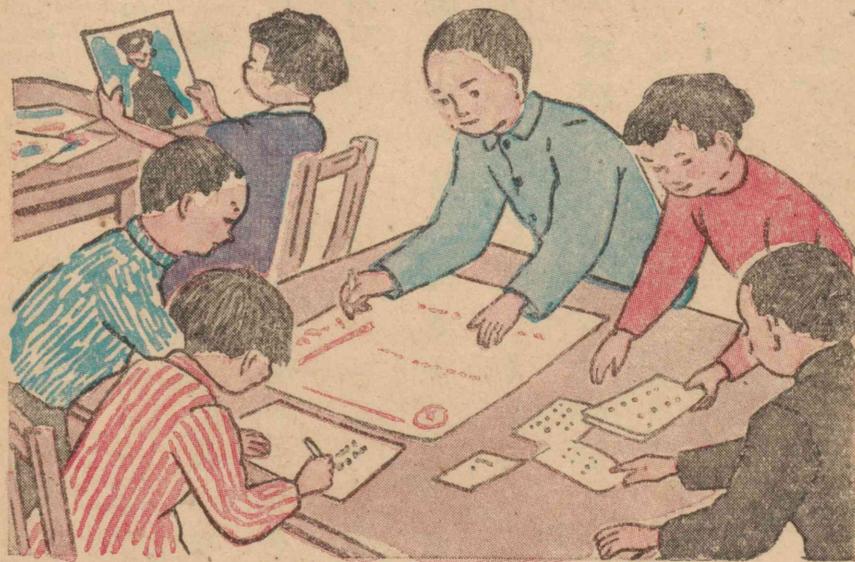
ぼくは先生の言われたことを、すぐ手ちように書きこみま

した。

放課後、一ぱんの人たちは教室に残りました。平野君と山川さんたちは、学芸らんの作文や、図画を選ぶ仕事をしています。

「みんな、熱心に出してくれたので、こんなにたくさん集まった。」

と、平野君はうれしそうです。ぼくたち、ニュースらんを書く者は、校内で集めたニュースを

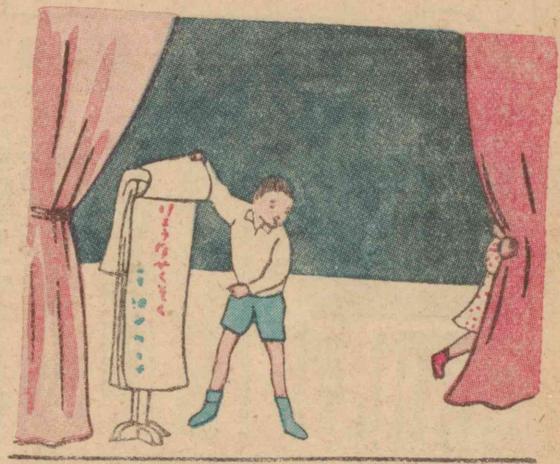


わら半紙に書きました。見出しはクレヨンで、太く、大きく書くことにしました。ぼくは、「校内野球リーグ戦いよいよ近づく。」と書きました。文章はえんぴつで、次のように書きました。

「ぼくたちの待っていた校内野球リーグ戦は、いよいよ来週の月曜日から始まる。みなさんの日ごろのうでまえを見せる時がきた。元気で戦おうではないか。」

山中君は三年生のしよとつのことを書きました。小山さんはその時のしよすを絵にかいて入れました。竹中君は、「近いうちに、放送局を見学することになっている。」と、受持の山田先生から聞いたことを書きました。川村さん





#### 四 学芸会の日

十一月のはじめに学芸会がありました。朝、学校へ行つて、講堂をのぞいてみると、きのう、六年生の人たちが準備した会場は、きれいにせいでんされ、ところどころに秋の花がかざられていました。間もなく、おとうさんやおかあさんたちも大勢みえました。

学芸会は九時三十分から始まりました。校長先生のあいさつがすんでから、プログラムの順に従つて、会が進んでいき

ます。

五年生のみち子さんが、「りこうなやくそく」という外国のお話をしました。四年生のただしさんが、「ありの研究」を発表しました。六年生のよし子さんたちが、「コップ遊び」というげきをしました。独唱や合唱やダンスもありました。先生のお話もありました。

#### (一) りこうなやくそく

ハンスは働き者のりこうなお百しょうでした。

ある日のこと、畑の中ほどに、何かぴかぴか光ったものが見えました。おどろいてよく見ると、きれいなほう石で、そ

のそばに小さなあくまがすわっていました。ハンスが、

「それはおまえのものかね。」

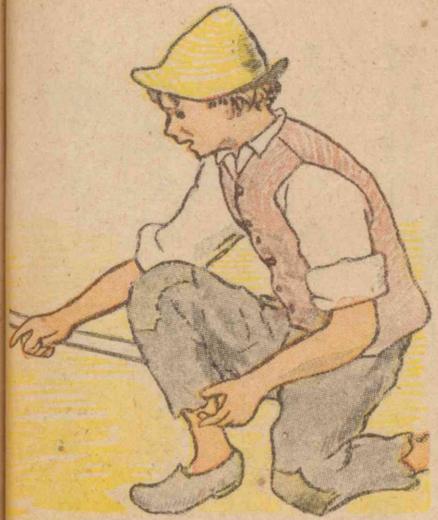
と聞くと、あくまは、

「そうとも。これは、おまえさんなどの見たこともないりっぱなものさ。だがね、おまえさんが畑の作物を半分くれたら、このたからはあげてもいいよ。」

と答えました。

そこで、ハンスはあくまとやくそくをしました。

では、地面の下の作物はわたしの分けまえ、上の作物はおまえ



さんのものと、決めておこう。

あくまもその分け方に賛成しました。

ハンスはにんじんの種をまきました。

取り入れの時になると、ハンスはみごとなにんじんをたくさんもらいましたが、地面の上のあくまの分けまえは、黄いろくかれたにんじんの葉ばかりでした。あくまは、

「おまえさんばかりいいところを取ってしまったね。この次には、地面の上のものはおまえさん、下のものはわたし、というふうにとりかえようじゃないか。」

と言いました。ハンスも

「それがいい、それがいい。」

と、やくそくを決めました。

ハンスは、こんどは麦をまきました。

取り入れの時がきて、ふたりはまた畑にやって来ました。

やくそくのとおり、ハンスは地面の上のくきを全部取り取りましたが、あくまのもらったのは、残った切り株だけでした。それで、あくまはぶんぶんおこつて、岩の間にすがたをかくしてしまいました。

ハンスはこうして、ほう石も作物も手に入れたということです。



## (二) ありの研究

ある日、ぼくが何を研究しようかと思ひながら、庭を歩いてみると、大きなありが何かせつせと運んでいました。

ありはからだは小さいけれど、りこうでがまん強いといふことを、ぼくは本で見たり、おかあさんから聞いたたりして知っていました。けれども、じっさいに研究してみたことはありません。そこで、ありの生活の仕方を、観察してみることになりました。

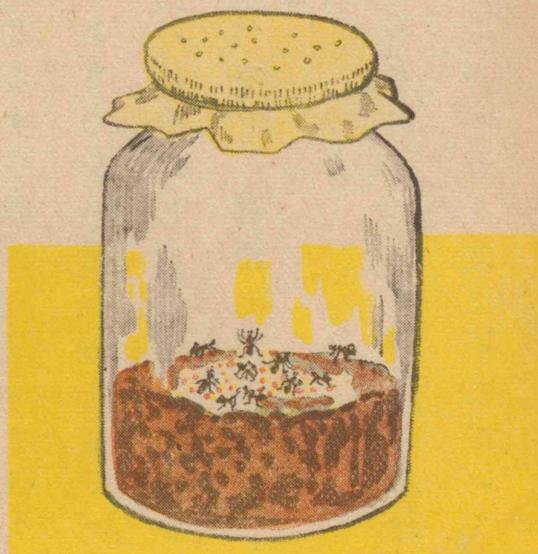
ありの住んでいる所の土を、すきどおったあきびんに半分ぐらい入れ、また、おかあさんからさとうを少しいたたいて、

それを入れ、同じ種類らしい黒  
ありを十五ひきほど入れました。  
びんの口は紙でふたをしてゴム  
でとめました。そして紙のふた  
に、空気あなをはりてあけてお  
きました。

しばらくたってから見ると、

五六ひきのありは、さとうの上で何かしていました。

二日ばかりたつと、中のさとうがなくなっていて、ありは  
いっしょうけんめい紙のふたからにげようとして、あなのと  
ころをかじっていました。すべったり、つかれたりして、



ぼたりぼたりと落ちていきます。それを何度も根気よくくり  
返しています。中にすを作ってくれとよいのにと、思って  
いたぼくは、がっかりしました。ありはにげることばかり考  
えているのです。

ある日の午後、びんを見ると、びんのふちに土がついてい  
ます。ぼくは、何をするのだらう、何かおもしろいことが始  
まるのではないかと思つて、そつとしておきました。

一週間ほどたつて、どうなったかと、楽しみにしてびんを  
見たところが、どこを見てもありはいません。死んでしまつ  
たのかと思つてさがしてみました。死がいもありません。  
そのうちにふと、ふたの紙に、ありが二ひきぐらい一度に通

れるようなあなが、一つあいているのを見つけました。

「おや、ふしぎだな。」

と思つて、そのふたを取ると、びんの口のところに土がいつぱいついています。にいさんに聞いたら、

「きつと、びんがすべるので、土を運んで足場を作り、そこからにげてしまったのだらう。」

と言いました。

からだは小さくても、ありはたえず努力して、にげ道を作つてしまつたのです。ぼくは、あんな小さな虫でも、いつしようにけんめいになると、大きな力が出るものだなと感心しました。

(三) コップ遊び

出る人

栄子さん

修次君

兼助君

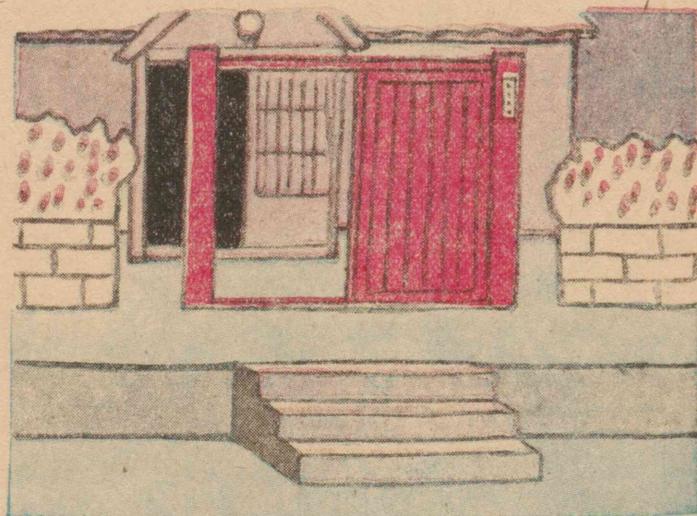
純子さん

所

栄子さんの家。木で作つた

門。三だんになつた石だんがあり、道に続いている。

純子さんが走って来て、門からはいり、げんかんの



戸をあける。

純子「栄子さん、紙しばいを見に行きませんか。あのさかな屋の横の所でやっているの。とてもおもしろそうだから、いっしょに行きましょうよ。」

栄子「だめだわ。わたし、おるす番をしなくてはならないのですもの。それより、わたしのところで遊んでいらっしやいよ。ラジオでもいっしょに聞きましょうよ。」

純子「でも、いま、子供の時間ではないから、おもしろくないわ。」

栄子「それでは、なぞなぞをして遊びましょうよ。」

純子「なぞなぞだって、たいていもう知っているものばかり

ですもの。」

栄子「それなら、何かおもしろいものを考えるわ。」

栄子さんは頭をかかえるようにして考える。修次君

と兼助君がわを回しながら、門の前を通りかかる。

栄子さんたちを見て、

修次「栄子さん、どうしたの。頭なんかかかえて、何を考えているの。」

栄子「何かおもしろい遊びがないかと思って考えているの。」

わたし、きょうはおるす番なの。」

兼助「そうか。それでは、みんなで何かして、ここで遊ぼうよ。」

栄子「あ、よいことを思いついたわ。ちよつと待っていてね。コップを持って来るから。純子さんもいっしょに来てね。」

栄子さんは、純子さんといっしょに、げんかんの中にはいり、コップとせんこうと、マッチのり、それから、水を入れた大きな金魚ばちを持って出て来る。

栄子「さあ、コップ遊びをしましょう。見ていてくださいよ。こうしてコップの底にせんこうをのりでつけます。このせんこうにマッチで火をつけます。つきましたね。このコップをさかさまにして、静かに水の中に入れてます。ほら、ふしぎでしょう。水の中に入れても、せん



こうの火が消えませんね。どうしたわけでしょう。修次「それはコップの中に空気があるからだよ。よし、それならこんどはぼくがやろう。コップが二つと、それからわりばしと、二本のろうそくがあったらいいのだけれど。」

栄子「すぐ持って来るわ。」

栄子さんが、またげんかんから家にはいり、コップ

とわりばしと、ろうそくを持って出て来る。

修次「あ、ありがとう。さあ、こうしてわりばしを十文字に  
むすびます。それから、一方  
のわりばしの両はしに、同じ  
長さのろうそくをさしこんで、  
平均がとれるようにします。

さあ、これで用意ができました。  
た。ろうそくのさしてない方  
のわりばしを、二つのコップ  
の上に乗せますよ。こうして  
おいて、両方のろうそくに火



をつけます。ほら、動き出しました。はしが、ガツタ  
ン、ガツタン、シーソーをやり出しましたよ。これは  
どういうわけでしょうね。

純子「それはふつうのシーソーと同じことだと思わ。はし  
がてこになっているのでしょう。」

修次「そうだよ。純子さん、よく知っているね。」

純子「ええ、おとうさんに教えていただいたことがあるの。  
それでは、こんどはわたしがやってみましょう。栄子  
さん、何かうすい紙がないかしら。ついでにはさみも  
貸してよ。」

栄子さんは、またげんかんから家にはいり、うすい

紙と、はさみを持って出て来る。

純子「はい、ありがとうございます。」

純子さんはそう言って、コップとうすい紙と、はさみを受け取ると、金魚ばちを持って、少しはなれた所へ行き、くると後向きになり、コップに水をいっぱい入れ、手早くうすい紙をコップの口の大きさに切り、目立たないように、コップの口におおいかぶせ、手で



おさえながら、みんなの方に向きなおる。コップをさかさまにして、静かに手をはなす。

純子「ごらんのとおり、このコップには水がはいっております。このとおりに、コップをさかさまにしても水が出ませんからね。ところがどうでしょう……。」

純子さんはそう言いながら、コップをもとどおりにし、さっと、目につかないようにうすい紙をとり、またコップをさかさまにする。

純子「ふしぎですね。からのコップから、このとおりに水が流れ出ますよ。どういうわけかわかりますか。」

修次「わからないね。」

兼助「むずかしいな。純子さんだって、だれかに教わったの  
だろう。それではこんどはほくだ。栄子さん 同じ大  
きさのコップを、八つばかり持って来てよ。」  
栄子さんは、また家にはいり、コップを八つ持って  
出て来る。

兼助「ありがとう。」

兼助君は受け取った八つのコップを、石だんの上に  
ならべ、それに水を、それぞれちがった量だけ入れ  
ていく。コップを水の量の順に一列にならべる。そ  
れから、さっきシーソーの時に使ったわりばしを手  
に持ちコップのふちをたたく。



兼助「どうです。コップのピアノで  
すよ。水の量で、高い音が出  
たり、低い音が出たりします。  
みんなで何か歌ってみませ  
か。」  
栄子「まあ、すてきね。コップ音楽  
会ね。さあ、歌いましょうよ、  
みんなで。」

みんなは、兼助君のコップ・ピアノのばんそうで、  
「村のかじや」を合唱する。合唱のどちゅうで静かに  
まく。

## 五 汽車

### (一) 鉄の馬

汽車が発明されたのは、今からおよそ百十年ほど前のことです。それまでは鉄道馬車といって、線路の上を、馬が車をひいて走っているだけでした。だから速力もおそく、乗せる人も荷物も少ないものでした。世の中がだんだんいそがしくなってくるにつれて、これでは間に合わなくなりました。なんとかして、もつと遠く、もつとたくさん、人や荷物を乗せて走る乗り物がほしいものだど、みんなが思うようになりま

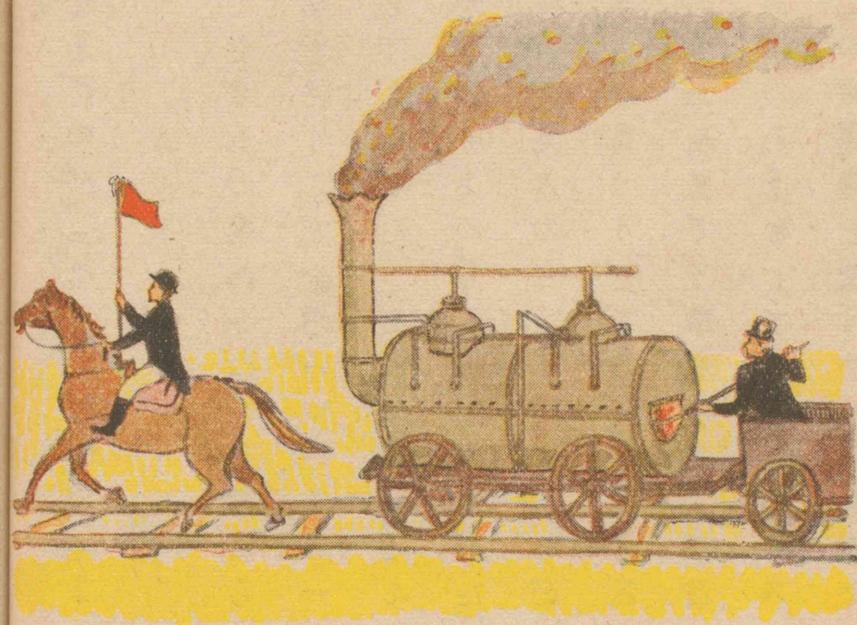


した。このみんなの望みをかなえたのが、イギリスのジョージ・スチブソンです。

スチブソンは、車をひいて走る馬の代わりに、そのころ発明されていた、じょう気機関を使うことを思いついて、一台の機関車を作りました。それは高いえんとつと、大きいかまのある機関車でした。いま、私たちが見るのとはずいぶんちがっていました。ちょうどその時、ある鉄道会社が、ある土地まで、旅客を運ぶ鉄道馬車を、あらたに作ろうとしていたので、スチブソンは、馬の代わりにこの機関車を使うように話をし

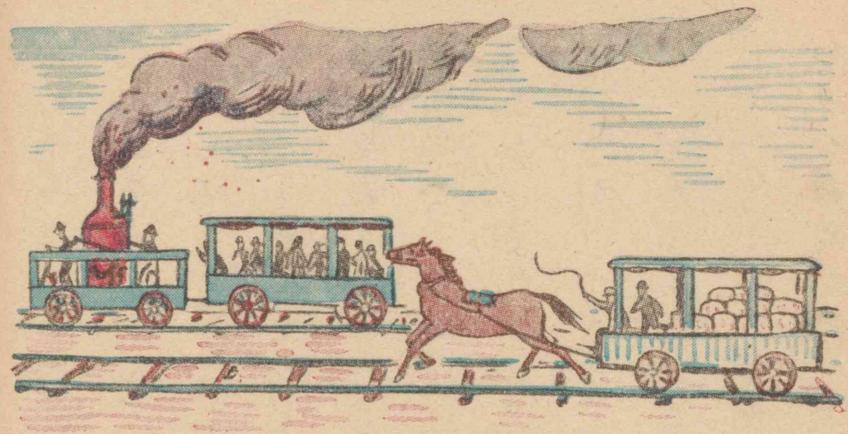
ました。そして、開通の時には、スチブソンは、自分でその機関車に乗りこんで動かしました。

鉄の馬は勢いよくけむりをはいで走り出しました。はじめて見る人々が、びっくりするといけないうので、ほんとうの馬に乗った人が、赤い旗をふりながら、機関車の前を走っていきました。はじ



めのうちはこわがって、この汽車に乗ってみようとする人は、だれもありませんでした。それに、線路のそばに住んでいるお百しようたちは、えんとつからはき出すけむりが、大切なにわとりを殺しはしないかと、たいへん心配しました。大きな音をたてて、けむりや火の粉をはきちらしながら進むこの機関車を、みんなはひどくこわがりました。

また、それから少しおくれで、アメリカ人のピーター・クーパーが、小さなじょう気機関車を作りました。この機関車が、どれぐらいの力を持っているか、馬と競争をさせることになりました。機関車は鉄道会社の人を乗せた車をひき、となりの線路では、見るからに強そうな馬が、荷物をつんだ車



をひくことになりました。合図の旗で、この二つの馬は走り出しました。クーパーはどんどんまきをもやしましたが、じょう氣の力が強くならないうちに、生きた馬はどんどん先の方へかけていきました。人々は、やはり馬にはかなわないではないかと思っていると、どうでしょう、じょう氣の力の強くなってきた機関車は、ぐんぐん速力を増し、とうとう馬を追いぬいてしまいました。ところが、運わるく機関車はこしょう

を起し、車が回らなくなっていました。クーパーはすぐ飛びおりて、こしょうをなおしましたが、その間に馬は追いついて、決勝点に飛びこんでしまいました。

この競争では、機関車は負けましたが、機械を改良していけば、きつと馬などいらぬ日があると、人々はかたく信じるようになりました。

そのうちに機関車は、客車や貨車をたくさんつないでひくようになりましたが、客車はかんたんな屋根をかけたただけのものでしたから、旅客は機関車のえんとつからふき出す火の粉をあびて、よくやけどをしたり、服をやいたりしました。その上、客車は短いくさりでつないだだけでしたから、発車

したり、停車したりするたびに、はげしくぶつかりあって、旅客はひっくりかえったり、のめったりしました。また、曲がった線路を走る時、機関車は車輪が大きかったので、よくだっ線したり、ひっくりかえったりすることがありました。また、とちゅうで燃料や水がたりなくなり、止まってしまいうようなこともあって、旅客がまきを取って来たり、水をくんだりして、手伝わなければならないこともたびたびありました。牧場の近くを走るような時、牛が線路にねそべって動かないので、わざわざおりて、牛を追ひ出さなければならぬという、こっけいなこともありました。

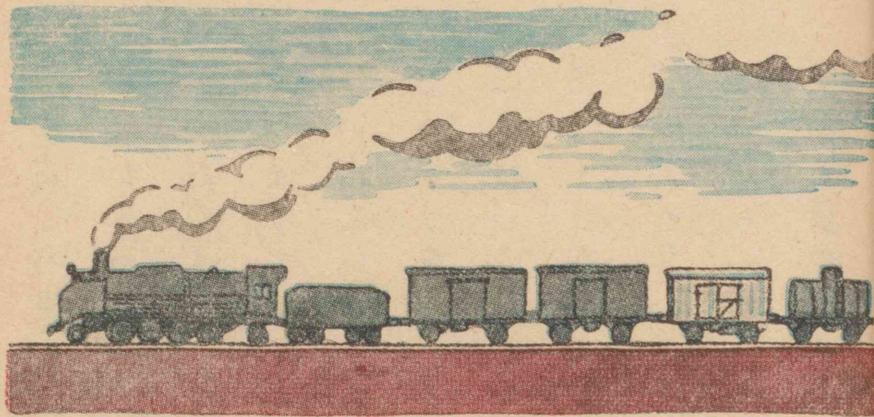
(二) 駅長さんの話

「三十一、三十二、三十三、……」

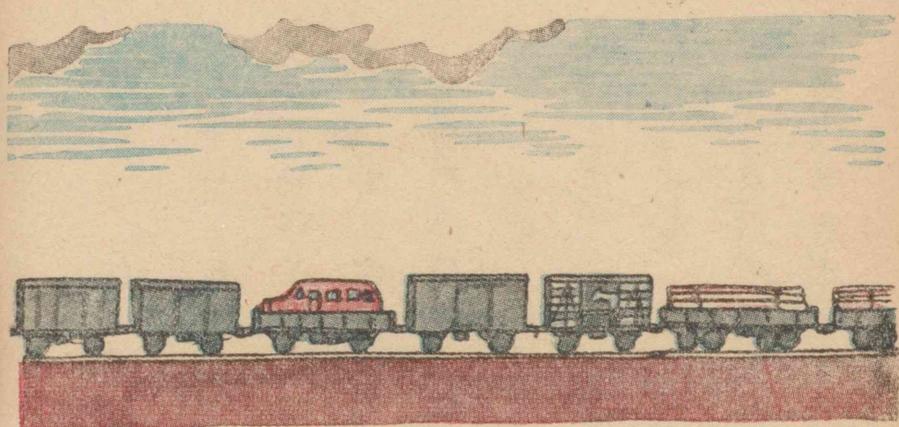
「まだ続いていよ。長いんだなあ。」

敬次君と実君は駅のさくにつかまって、目の前を走って行く貨物列車の数を数えていました。日曜日の午後でした。風は冷たいが、太陽の光は、ふたりの小さなせなかをあたためています。

とつぜん、耳が聞えなくなるような、大きな汽てきの音がして、反対の方から急行列車が、ごうごうと地ひびきをたてて走って来ました。すさまじい音です。たちまち通り過ぎま



と、敬次君が言いました。  
そこへかず子さんが、妹のあき子ちゃんをおぶってやって来ました。  
「ね、敬次さん、さっきとても長い貨物列車が通ったでしょう。何台つないでいたの。」  
「何台だかわからなかった。」  
「かず子さん、いろいろな車があったよ。」



した。急行列車は小さなこの駅には止まらないのです。  
「すごいなあ。」  
「ずいぶん速いんだね。」  
「君、貨物列車はどこまで数えたのだったかな。」  
「そうだね。すっかりわからなくなっ  
てしまったよ。」  
ふたりはつまらなそうな顔をして、  
貨物列車を見送りました。  
「ぼくもあんな速い急行列車に乗って  
みたいなあ。きつと気持がいいだろう  
ね。」

「そうだ、石炭をつんでいるのや材木をつんでいるのや……」  
「それからね、牛が頭を出している車もあったよ。自動車を  
つんだのもあったね。」

「そうそう、白くぬった車もあったね。」

「ずいぶんいろいろな車があるのね。でも、その白い車って、  
どういう車かしら。」

三人はいろいろ考えてみましたが、わかりませんでした。

「あ、そうだ。駅長さんに聞いてみようよ。」

敬次君が言いました。

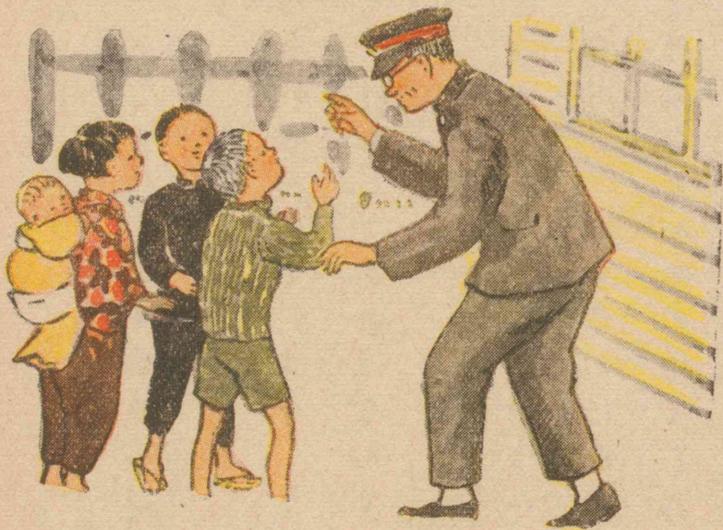
「それがいいね。」

実君が賛成しました。

駅長さんは子供がすきで、ひまがあると、おもしろい話や  
めずらしい話をしてくれます。だから村の子供たちはみんな、  
駅長さんとなかよしです。

三人は駅の事務室の前まで行き、  
せのびをして中をのぞいてみました。  
た。駅長さんはたばこをすっていました。  
ました。駅長さんはまどのところ  
にいる敬次君たちを見つけてにっ  
こりわらい、すぐ敬次君たちの方  
へ歩いて来ました。

「駅長さん、こんにちは。」

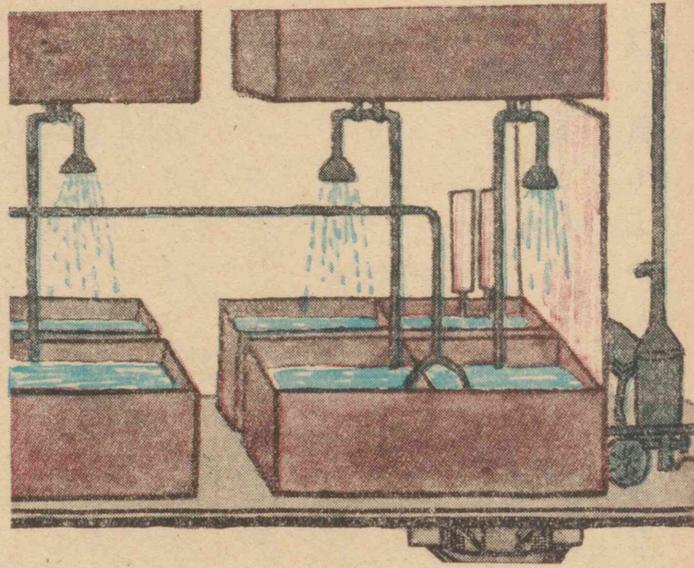


みんなが元気な声で言いました。

「やあ、こんにちは。きょうはあたたかいね。かず子さんはいつもおもりをして感心だね。」

「あのね、駅長さん。さつき貨物列車が通ったでしょう。その中に白くぬった車があったのですけれど、あれはなんですか。」

「ああ、あれかね。あれは冷蔵車といってね、くさりやすい魚や肉などを運ぶ時に使うものなのだよ。冷蔵車のほかに、通風車というのものもあるよ。それは野菜などが車の中でむれないように、風がよく通るしかけになっているのだよ。それから、牛や馬などを運ぶ家ちく車というのものもあるし、魚



を生きたまま運ぶために水おけのついている、活魚車というものもある。また、こわれやすいせと物などを運ぶ時に使う、とうき車というのものもある。これにはちゃんとなができていて、そこへ乗せられるようになってくるのだよ。」

「みんなはすっかり感心してしまいました。こんどは、かず子さんがたずねました。」

「それから、まるいつつのようなのがありましたけれど、あれは何を運ぶのですか。」

「まるいつつというところ、あ、そうか、あれはね、タンク車と違って、石油とかガソリンとかを運ぶための車だよ。」

駅長さんはいちいちわかりやすく説明してくれました。そしてポケットから大きな時計を出して見ながら、

「もうそろそろ汽車の来る時こくだ。敬次君たち、少し待っていてくれないかね。」

と言つて、事務室へはいつていきました。

駅員さんが改さつ口で、きつぶを切り始めました。きょうは天気もよいし、日曜日なので、駅はだいぶこみあつていま

す。重そうな荷物をさげた人や、子供の手をひいた人、年とつた人、わかいい人、男の人、女の人、たくさんの人たちが、みんな、きつぶを切ってもらつて、ぞろぞろとホームへはいつていきます。間もなく、上り列車がはいつて来ました。お客さんが大勢乗つています。ホームにいた人がすっかり乗り終ると、駅長さんは機関車の方を向き、白い手ぶくろをはめた手をあげて、静かにふりました。機関士さんはそれを見ると、すぐ顔をひっこめました。

「ポーツ。」

と、汽てきを鳴らして、汽車はゆっくり動き出しました。十三台つながつている一番後の車には、赤いしるしをうでにま

いた車しようさんが乗っていました。汽車はだんだん速くなり、とうとう見えなくなりました。

「やあ、お待ちどうさま。」

しばらくすると、駅長さんが敬次君たちのところへやって来ました。

「さっきは貨物列車の話をしてあげたが、こんどは客車の話をしてあげようかね。客車にはどんなのがあるか実君、知っているかね。」

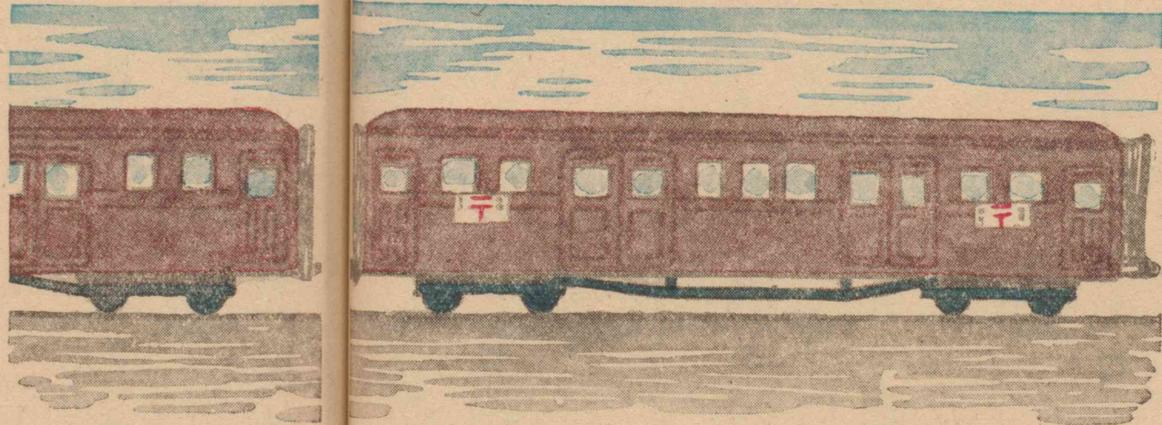
「ええと、お客の乗る車と、荷物を乗せるのと、それからゆう便物をつむ

のと、……」

「そうそう。荷物を乗せるのは手荷物車というのだよ。旅行する時に持っていく、ちよつとした荷物を乗せるのだ。ゆう便物に乗せるのはゆう便車だ。いま行った汽車にも、一番後についていたよ。そのほか、しん台車や、食堂車、展望車など、いろいろな種類の客車がある。敬次君、こんどは君に聞くが、いま、汽車はだいたいどのぐらいの速さで走っているのだらうね。」

「さあ、……」

「では、かず子さんはどうだね。」



「駅長さん、この間私たち、学校から汽車に乗って展らん会を見に行つたでしょう、あの時に行つた町の駅とこの駅との間は、どれぐらいはなれているのですか。」

「おやおや、かず子さんは反対に質問するのですか——。そう、五十キロぐらひはあるかな。」

「では、汽車の速さは一時間五十キロぐらひです。」

「どうしてわかるの。」

「あの時、ちようど一時間かかったのです。」

「ほう、かず子さんはなかなか頭がいいね。そのとおりだよ。ところが、一番速い急行列車は、一時間に七十キロぐらひの速さで走れるのだよ。」

「うわっ 速いなあ。—— 駅長さん、おとなは一時間に何キロぐらひ歩けますか。」

「まあ、ふつうの人なら四キロぐらひだろう。足の速い人なら、五キロか六キロは歩けるかもしれなひ。」

「そうすると、急行でないふつうの汽車でも、人間の十倍以上も速いんですね。」

「そういうことになるね。むかし、汽車などのなかつたころには、東京から京都まで行くのに半月もかかつたそうだよ。人はねむったり休んだりしないと、何日も何日も歩き続けることはできないのだからね。今では、十二時間ぐらひ乗つていれば行つてしまふのだ。」

駅長さんは話を続けました。

「ほんとうに便利になつたものだよ。汽車は速いばかりでなく、力もあるよ。米を運ぶのに、何も道具を使わないとすると、ふつうなら、ひとりで一度に一俵かつぐのがやつとだよ。馬はおなかの両側に二俵ずつつけるとすると、一度に四俵は運べる。手車は八俵ぐらいしかつめないし、荷馬車でもせいぜい五十俵ぐらいなものだ。ところが汽車となると、一度に一万俵以上も運べるのだから、たいしたものだろう。」

駅長さんは、自分が貨車にでもなつたように、じまんして言いました。みんなは目をまるくしました。

「一万俵も。」

「すごいなあ。」

「そうすると、汽車は一度に、おとなの一万倍の仕事をするわけなのね。」

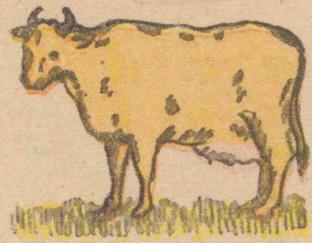
三人は口々に言いました。駅長さんは三人の顔を見ながら、ここにこして言いました。

「ほう、きょうはずいぶん話をしたね。」

「駅長さん、ありがとう。」

敬次君と実君とかず子さんは駅長さんにおじぎをしました。「やあ、また遊びにいらっしやい。」

駅長さんはそう言つて、事務室にはいつていきました。



六 放送を聞く

(一) 子牛 (放送げき)

完一 (兄 六年生)

英次 (弟 四年生)

そのほか、完一と英次の友だち三名。

秋の午後。村はずれの草原。もずが鳴く。完一が

草をかる音。まもなく、その音がやむ。

完一「英次はどうしたのだろう。——きょうは草かりをする

から早く帰って来る。だから、ぼくの草かごを持って

来ておいてくれ——なんて、あんなにやくそくまでし

ておいたのに。——急に当番になったのかな。

また草をかり続ける音。しばらくして、

完一「あ、向こうから来るのは省造君だな。——おい。」

省造「ああ、完一さん、もう草をかつてるの。」

完一「うん。省造君、英次を知らないか。」

省造「知らないよ。」

完一「当番じゃなかった。」

省造「ううん、きょうは三の組だからちがうよ。」

完一「どうしたんだらう。英次にどこかで会ったら、すぐに  
来いって——そう言ってくれない。」  
省造「うん。」

省造「何か歌いながら行ってしまふ。」

完一「仕方がないな。いったい何をしているのだらう。」

また草をかる音。

足音がして、勇作（六年生）が出て来る。

勇作「完一君、もう働いているの。」

完一「だれかと思つたら、勇作君か。」

勇作「かごに二つもかるの。たいへんだなあ。」

完一「一つは、ぼくのではないのだよ。英次のだ。英次のや

つ、まだ来ないのさ。勇作君、英次を知らない。」

勇作「学校には、いなかつたようだよ。どこへ行つたのかな

あ。」

完一「いいよ。そんなやつ、もう相手にしてやらないから。」

勇作「英次君のことだから、すぐに  
来ると思うよ。」

完一「もしとちゅうで会つたらね、

ぼくがぶんぶんおこっている  
からと言っておくれ。」

勇作「ああ、いいよ。ではさよなら。」

勇作「行ってしまふ。もず



がまた鳴き出す。

完一「ほんとうにどうしたんだらう。うちへ帰って、何かほかの仕事でもしているのかな。それとも、ぼくとのやぐそくをわすれたのかしら。——あ、ゆきさんが来た。きいてみよう。——ゆきさん、英次を知らないかい。」  
ゆき「英次さんはね、清治さんにかばんをわたして、とうげ道の方へ走って行ったわ。」

完一「それほんとうかい。だれかといっしよだった。」

ゆき「ううん、ひとりで急いで走って行ったわ。」

完一「それがほんとうだとしたら、おかしいな。」

ゆき「どうかしたの。」

完一「いや、なんでもないんだ。」

ゆき「見つかったら知らせてあげるわ。」

ゆき、行ってしまふ。

完一「英次、ほんとうにどうしたのだらう。心配をかけるのにも、ほどがある。帰って来たら、さんざんおこつてやろう。」

完一は、「英次、英次」と、英次の名をよぶ。初めはおこっているような声でよんでいるが、だんだん悲しそうな声になる。

完一「ほんとうに英次、どこへ行ったんだらう。英次——英次——」。

英次「小さな声で」にいさん。

完一「小さな声で」おや、英次の声だ。——英次、出てお  
いで。

英次「にいさん。」

完一「おこつてるんだよ。ものなんか言つてやらないから。」

英次「にいさん、ごめんね。」

完一「知らないよ。やくそくを破つて、道草を食つて遊ぶよ  
うなやつは。」

英次「ごめんね。ぼく、すぐ草をかるよ。」

完一「もう、かつてなんかいらないうよ。そのかまをおよこし。」

英次「にいさん、いたいよ。」

完一「あたりまえさ。手伝つてもらわなくてもいいよ。さあ、

どこかへ遊びに行つておいで。」

英次「にいさん、ぼく、遊びたくはないよ。」

完一「じゃ、今まで、どうして遊んでいたのだ。」

英次「遊んでなんかいなかったよ。」

完一「ちゃんと知つてるよ。清治君にかばんをあずけて、と  
うげ道の方へ遊びに行つたらう。何もかも知つてるよ。」

英次「そしたら、くろのことも。」

完一「くろつてなんだい。」

英次「ほら、あのくろさ。ことしの春売った、うちの子牛の  
くろのことだよ。」

完 一「そのくろがどうしたのさ。」

英 次「」。

完 一「さ、そのくろがどうしたのさ。」

英 次「くろがどこへ売られて行

ったかわからないので、

にいさんだつて、ずいぶん心配していたらう。」

完 一「うん。」

英 次「そのくろに会ったのだよ。」

完 一「いつ、どこで。」



英 次「ぼくが急いで学校の門を出たら、大きな荷物を積んだ

車をひいている子牛に会ったのだよ。初めは気がつか

なかつたけれど、その子牛がぼくの方を見て鳴いたの

さ。よく見るとそれがくろなのだよ。ぼく、びっくり

して立ち止まっちゃった。」

完 一「そしたら。」

英 次「ぼく、くろに何か言おうかと思つたけれど、牛をひい

ているおじさんが知らない人だったから、だまってい

完 一「くろ、どんな顔をしていた。」

英 次「大きな目でぼくの顔をじつと見ていたよ。荷物がきつ

と重いんだね。よだれを流していたよ。

完一「そして、どっちへ行ったんだ。」

英次「とうげの方へ。ぼくはくろがかわいそうなものだから、少しついて行ったのさ。ちようどそこへ清治君が来たので、かばんをたのんで、思いきって走って行ったんだ。ぼく、にいさんに悪いと思っただけね。」

完一「そしたら。」

英次「とうげ道へ行ってみたら、くろは車が重いので大こまりなんだよ。」

完一「そのおじさんは車をひっぱらないのかい。」

英次「うん。ひっぱっているけれど、重そうなんだ。」

完一「おしてやったか。」

英次「うん。ぼく、にいさんとふたり分の力を出したよ。」

完一「そうか。くろは喜んだらうね。」

英次「うん。——だから、うれしそうに鳴いたよ。」

完一「それから、どこまでついて行ってやった。」

英次「ぼく、もう少しついて行ってやりたかったけれど、にいさんとのやくそくもあったし、とうげのまつの木に登って、



じつと見送ってやったの。なんだかくろがかわいそう  
でね。

完一「ぼくも、くろに会いたかったなあ。」

英次「ぼく、にいさんにも知らせようかと思つたけれど、く  
ろを見うしなうといけないと思つたから——」。

完一「今から追いかけて行つても会えるかしら。」

英次「もうだめだよ。」

完一「——」。

英次「ね、にいさん。いつかくろを見に行こうよ。きっと、

とうげの向こうの村のあたりにいると思うよ。」

完一「うん。いつかたずねて、うんと草をやるうね。」

英次「にいさん、ごめんね。おそくなつて。」

完一「いいんだよ。でもずいぶんおそいので心配したよ。」

英次「ほんとうに、ごめんね。」

完一「あ、そうだ。英次、おあがり。おなかがすいたろう。」

いもを持って来たんだよ。おあがり。」

英次「いいんだよ、あとで。——日がくれないうちに、この  
かごにいつぱい草をからないといけないから。」

完一「にいさんも手伝つてやるよ。さあ、おあがり。」

英次「うん、食べようかな。にいさんは。」

完一「ぼくも食べよう。」

英次「モオ、モオ。」

完 一「どうしたの。」

英次「あの時のくろの鳴き声を思い出したのだよ。」

ふたりで牛の鳴きまねをする。――

もずの声。――静かな音楽。

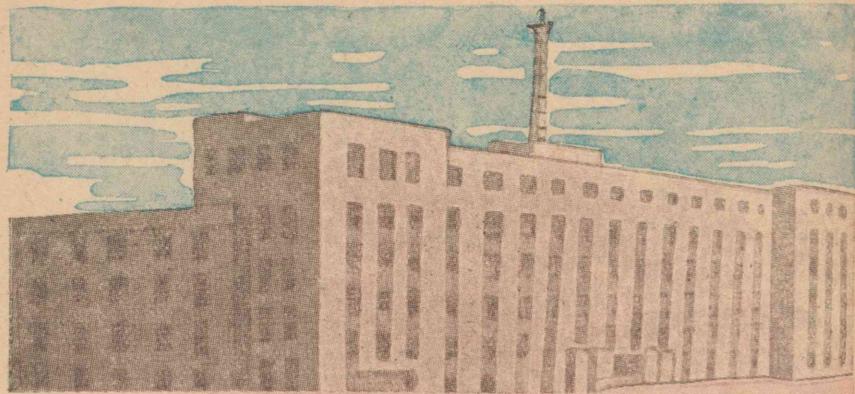
## (二) 放送局の見学

きょうは放送局見学の日である。朝のラジオを聞いていても、その放送をしているところが見られるのだと思うと、むねがわくわくする。

午前十時、日比谷公園に集まって放送局に向かった。大きな建物がたくさんならんでいる。新しい型の自動車が、音も

なく走っているのは、見ていて気持がよい。少し歩いて行くと、右側に四角な建物があつた。これが放送局であると聞いて、ぼくはちよつとびつくりした。ぼくは、もつときれいで、えい画館のようなところだと思つていたのだ。ところが外から見ると、まるで役所かなんかのようにながっちりしている。

横の入口からはいった。人々がいそがしそうに出たりはいたりしている。受付のところでは、先生がお話をなされた。



ひとりのおじさんが来られて、中へ案内してくださいました。ろ  
うかは、昼間なのに明かるい電燈がついていた。どんだんお  
くへは行って行った。右に曲がると、両側にいくつもへやが  
ある。みんなしまっている。まるでトンネルの中のようなだ。  
宮田さんが、「こわいわね。」と言ったら、先生が、

「なんでもありませんよ。でも、あまりさわがしくしないよ  
うにしましょう。」

と言われた。なるべく足音をたてないように歩いた。

第五スタジオと書いてあるところに止まって、少し待つて  
いると、案内のおじさんがドアのかぎをあけた。

「さあ、はいつてください。」

ぼくたちはこわごわはいつていった。はいると、左側に小  
さいへやがあった。それに続いてもう一つドアがあって、そ  
れをあけて中へはいつた。がらんとしたところで、ピアノが  
一台と、つくえやいすがおいてあった。

おじさんは、みんなはいりきると、説明をしてくださいました。  
「これが放送するへやです。スタジオといいますが、このよう  
なへやがいくつもあるのです。もっと大きなスタジオもあ  
ります。あとで見せてあげますが、みなさんの学校の講堂  
ぐらいある第一スタジオや、これよりもっと小さいスタジ  
オもあります。この放送局には、大小合わせて十五ありま  
す。さて、みなさん、このへやにはいつて気付いたことは

ありませんか。

おじさんのことばに、みんなはへやのあちこちを、きよろきよろ見回した。福田さんが、

「かべや下のゆかがちがうと思います。」  
と言った。

「そうですね。このスタジオには、かべやゆかに防音そうちがしてあります。フェルト、コルク、布、じゅうたんなどをうまく重ねて、音がはね返ってやかましくならないようにしてあるのです。」

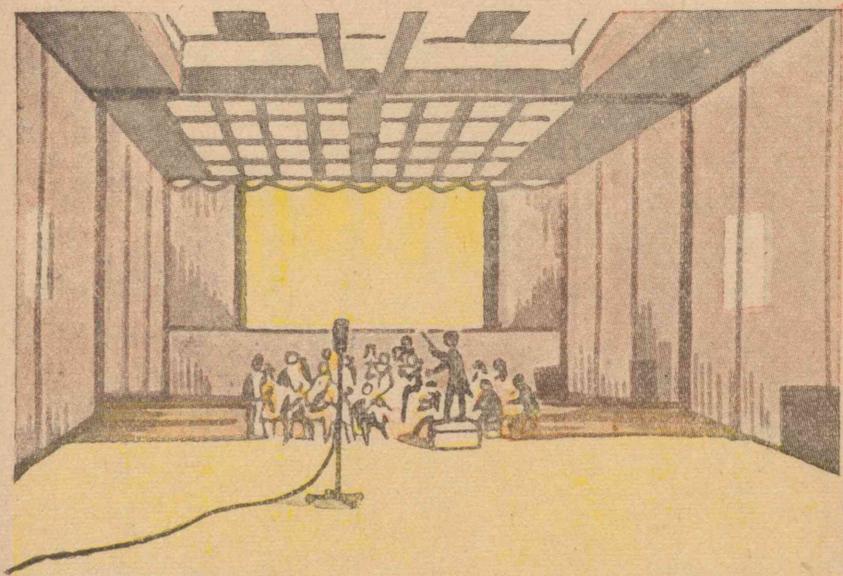
「おじさん、あのへやは何をすることでですか。」

湯川君は、スタジオとガラスでしきられている、となりの

へやのことを聞いた。

「あれは調整室といって、係の人が、このへやで放送した音を、大きくしたり小さくしたりするところです。放送のようすがよく見えるように、ガラスでしきってあるのです。帰りにのぞいていきましょう。調整する機械がそなえてありますよ。」

おじさんの説明を聞いているうちに、ほんとうの放送をしているところが、早く見たくなってきた。このスタジオを出て階段を上がり、こんどは大きな第一スタジオにはいった。教室の三倍ぐらいいもある広さだ。天井がものすごく高い。ちやうど、ここでは放送げきの練習をしていた。大勢の人が



だんの上で音楽のばんそうも  
していた。スタジオにはいる  
のはいけないので、調整室か  
ら見ていた。マイクロホンが  
いくつも立っていた。ぼくは  
いろいろな形のマイクロホン  
があるのにおどろいた。テー  
ブルの上にコーヒーの茶わん  
がいくつもあったので、何を  
するのかと思っていたら、げ  
きのさいちゅうに、その茶わ

んを持って行って、マイクロホンの前でカチャンカチャンと  
音をたてて、すぐひき下がっていく人がいた。おじさんに聞  
いたら、

「あれはぎ音の係で、今のは台所のようすを表わしたのです  
よ。たとえば、げんかんをはいる時、ベルをおしますね。  
ほら、あそこにそのベルがあるでしょう。それから雨の音  
やいろいろな音もくふうして出すのです。おもしろいでし  
ょう。」

と説明してくださった。うまいことをやるものだと思った。  
この間も、放送げきの時、電車の音や汽車のけいてきが聞え  
たので、どうやるのだろうとふしぎに思っていたが、それも

ああしてぎ音をくふうするのだとよくわかった。

第一スタジオの見学を終って、おじさんから、番組ができるまでの話や、放送局の数やアナウンサーの数を聞いた。番組ができるまでには、ずいぶんいろいろな手数がかかることもよくわかった。放送局は全国で四十五もあるということだ。それから、ここの放送局にはアナウンサーが五十人もいて、女の人も八人いるのだそうだ。古賀さんが、

「大きくなったらアナウンサーになろうかしら。」  
と言った。先生は、

「アナウンサーになるには、正しいことばづかいができなくてはいけませんね。」

とおっしゃった。

### (三) ことばの音

学校放送の時間に、四年生がみんな講堂に集まって、「ことばの音」という放送を聞いた。たいへんためになる放送だった。

雨がふれば、「かさ」をさします。

きれいな「かみ」に印刷します。

動物園には、「さる」がいます。

目はものを、「みる」に使います。

雨の時に「さす」か「さ」は、その音を逆にして言うと、「さか」にな

ります。坂道の「さか」です。

こうしてみると、私たちのことばが、音の組み合わせでできていくことがわかるでしょう。私たちのことばに用いられる音は、いくつあるでしょうか。

ア イ ウ エ オ  
カ キ ク ケ コ  
サ シ ス セ ソ  
タ チ ツ テ ト  
ナ ニ ヌ ネ ノ  
ハ ヒ フ ヘ ホ  
マ ミ ム メ モ

ヤ ユ ヨ  
ラ リ ル レ ロ  
ワ

まず、右にあげた四十四の音があることはたしかです。かなには「あ(ア)」「え(エ)」を「ワ」などもありますが、「あ(ア)」は「い(イ)」と同じ音ですし、「え(エ)」も「え(エ)」と同じ音です。「を(ヲ)」も「お(オ)」と同じ音であるといえます。

この四十四の音を組み合わせると、いろいろのことばができます。アとシとを組み合わせると、「足」ということばができます。アの代わりにイを、シと組み合わせると、「石」になります。ウとシとを組み合わせると、「牛」になります。もし、アと

カとイと、この三つを組み合わせると、「赤い」ということばができます。カの代わりにサを入れると、「浅い」ということばができます。サの代わりにマを入れると、そら、さとうのあじが言い表わせるでしょう。

アとタとマとを組み合わせると「頭」、コを二つ重ねて口をつけると、「心」となりますね。

「なかよし」は、ナとカとヨとシの四つの音でできています。

「集まる」はアとツとマとル、「うれしい」はウとレとシとイで、やはり四つの音でできています。

このように、いろいろの音を組み合わせてことばができます。しかし、中にはただ一つの音でできていることばもあります。

みなさんは「絵」をかくことがすきでしょう。木や草には「根」がありますね。人間の顔には「目」があります。「絵」や「根」や「目」は、エだとか、ネだとか、メだとかいう、ただ一つの音でできています。

私たちのことばに使う音はこれだけでしょうか。まだあります。

ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
ダ			デ	ド
バ	ビ	ブ	ベ	ボ

この十八の音はだく音といひます。かなには「ち(ヂ)」「づ(ヅ)」  
といふのもありますが、「ち(ヂ)」「は(ジ)」と同じ音、「づ(ヅ)」は  
「ず(ズ)」と同じ音です。

みなさんは買物に行く時、何を持って行きますか。ふるし  
きですか。そのほかに何かありませんか。「かご」を持って行く  
こともありますね。おもてでは「風」がふいていますよ。「かご」は  
カとゴ、「風」はカとゼとでてきていますね。また、

バ ビ ブ ペ ポ

という音もあります。

私たちのことばに使う音は、もうこれだけでしょうか。ま  
だまだあります。

キヤ	キユ	キヨ
シヤ	シユ	シヨ
チャ	チュ	チヨ
ニヤ	ニユ	ニヨ
ヒヤ	ヒユ	ヒヨ
ミヤ	ミユ	ミヨ
リヤ	リユ	リヨ
ギヤ	ギユ	ギヨ
ジャ	ジュ	ジョ
ビヤ	ビユ	ビヨ
ピヤ	ピユ	ピヨ

ミュというのはあまり使わないようです。この三十二の音は、カやダと同じように、やはり一つの音なのです。ですから字を書く時にも、下の「ヤ」(y)、(yu)、「ヨ」(yo)は小さく書きま

す。この三十二の音を、「よう音」といいます。  
「汽車」はキとシャとを組み合わせたものですし、「百」はヒヤとクでできています。

それでは、みなさんが読む本は、どういう音でできていますか。みなさんとなかよしの「とんぼ」は、どういう音でできていますか。今まで調べてきたものと、ちがった音が使ってありませんか。ありますね。「ン」という音がありますね。

汽車や電車に乗るのに、「きつぶ」がいらいますね。

この「きつぶ」や、音楽の時に鳴らす「ラツパ」には、どんな音が使ってありますか。「きつぶ」や「ラツパ」には、今まで調べてきたのにはない音があります。どんな音でしょう。

音をいろいろに組み合わせ、たぐさんのことばができることは、もうわかったと思います。ところが、カとキとを組み合わせるでできた「カキ」ということばには、木になる「かき」もありますし、海でとれる「かき」もあります。それから、家のまわりをめぐらす「かき」もあります。どれもこれも、カという音とキという音でできていますが、東京のことばでは、海でとれる「かき」は、カのを高く言い、キのをそれよりも低く言います。家のまわりのかきは、反対に、キの方をカよりも高く

言います。木になる「かき」は、カもキも同じ高さで言います。このように、ことばはいくつかの音を組み合わせるだけでなく、ある音をとくべつ高く言ったり、低く言ったりします。これをアクセントといいます。ですから、木になる「かき」、海でとれる「かき」、家のまわりの「かき」は、音は同じですが、アクセントで区別されているわけです。木や草にさく「花」と、顔にある「鼻」も、アクセントで区別されます。東京では、「花」はハよりもナの音を高く言いますが、顔にある「鼻」は、ハもナも同じ高さで言います。

みなさんも、ことばがどんな音でできているかをよく調べて、正しく発音ができるようにしましょう。



## 七 動物の話

### (一) 動物をつかまえる話

動物園には象やきりんや大へびなど、いろいろな動物がいます。おりやさくの中でおとなしくしています。山や野や森などにいた時には、きつと思うぞんぶんあばれまわっていたことでしょう。

象やきりんや大へびなどは、どのようにしてつかまえるのでしょうか。動物園でかうには、生きたまま、きず一つつけないうつかまえたものでなければなりません。つかまえ方は

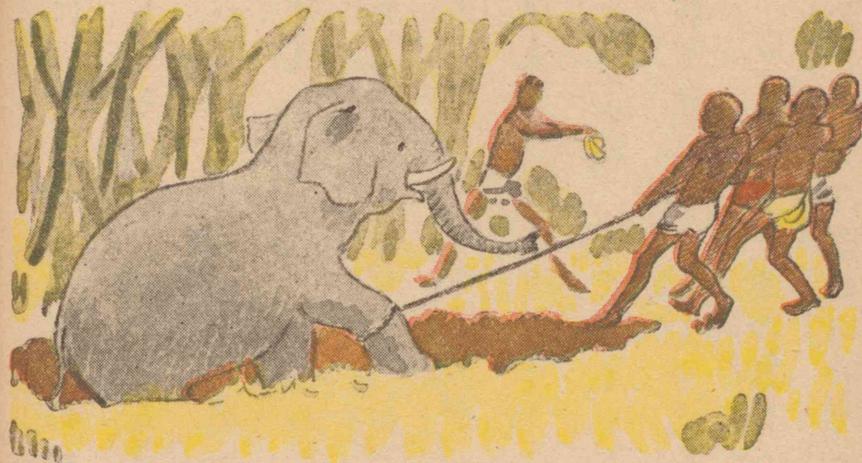
その土地土地によつてちがいますが、ここでは、アフリカで行われているつかまえ方をお話しましょう。

たいていの動物は、山や森ではそれぞれ群れをなして住んでいます。そして、だいたい通る道が決まっています。象もそうです。そこで、その通り道におとしあなを作っておきます。けれども、体重が三千キログラムもある大きな象は、とてもつかまえることができませんから、おとしあなは、初めから小さな象をねらつて作ります。しかし、小さな象だからといって油断はできません。

まず、その通り道に、三メートルに五メートルぐらいの長方形で、深さ一メートルぐらいのあなをほります。あなの上

に、木のえだや草をおおいかぶせて、あなが見えないようにし、その上に、象の大ききな、ドリアンというくだものを置いておきます。ドリアンは、においが強く、二百メートルほどはなれていてもわかるぐらいです。その近くを通りあわせた象が、そのにおいにひきつけられてやつて来ます。来てみると、大すきなドリアンが置いてあるではありませんか。象は大喜びで、そのドリアンを食べようと、長い鼻をのばしたとたんに、ドタンと、おとしあなの中に落ちてしまうという訳です。

ところで、その落ちた象をどうして引き上げるのでしょうか。小さな象といっても千キログラムもあるのです。それに、



あなの中に落されたので、象もいっ  
らかおこっています。そこでまず、  
あなのふちの土を少しづつけずり落  
して、あなを浅くします。浅くして  
から、人がそつとおりていって、ロ  
ープで一本の足をくくりまわす。そし  
て、三十人ぐらいの人たちが集まっ  
て、よいしょ、よいしょと引っぱり  
上げるのです。しかし、ただ引っぱ  
っただけでは、なかなか動こうとも  
しませんから、象のすきなドリアン

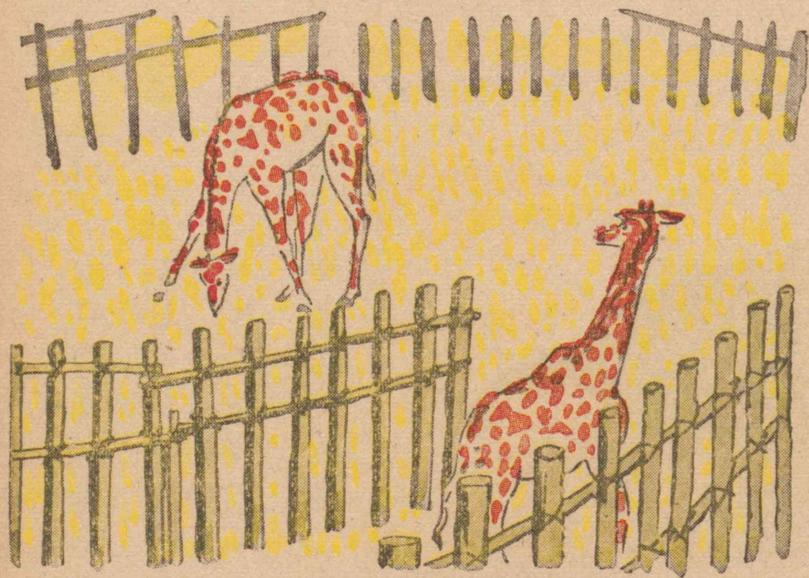
やバナナで、ごきげんをとりながら引っぱるのです。鼻の先  
にドリアンやバナナを差し出されると、さすがの象もたまら  
なくなり、ドシン、ドシンと、大きな足で土をふみならしな  
がら上がって来ます。上がって来た象は、あらかじめ作って  
おいた、まる太のさくの中へ入れられます。こうして、さく  
の中に二三か月入れておき、象のすきなえさをやってかいな  
らすのです。

きりんはどうしてつかまえるのでしょうか。追いかけてい  
って、あの長い首に、投げなわなどをかけてつかまえるとこ  
ろもあります。しかし、なにしろ足の速いきりんのことです  
から、それはなかなかむずかしいことです。そこで、たいて

いのところでは、きりんの集まりそうな場所に、まる太を打  
ってじょうぶなさくを作ります。さくの中は四千平方メート  
ルぐらいにします。そのさくの中にさらにさくを作って、一  
度はいれればもう出られない、迷路のようなものにします。そ  
して、その中にかいならしたきりんを入れておきます。この  
きりんは、数が多ければ多いほどよいのです。そして、この  
きりんたちに、大こう物のえさをやっておきます。このきり  
んたちがおいしそうに食べているようすを見て、ほかのきり  
んたちはたまらなくなり、知らず知らずのうちに、さくの中  
へはいつてしまうのです。きりんがさくの中にはいったのを  
見ると、見張りの人はかくれ場所から飛び出し、大急ぎでさ

くの戸を固くしめます。このように、さくの中へきりんをさ  
そいこむまでのしんぼうがたい  
へんです。さくを作って、かい  
ならしたきりんをその中に入れ  
たからといって、すぐにはきり  
んはやって来ません。一週間も  
十日も、じっと待っていなけれ  
ばならないのです。

大きなへびをとるのはわりあ  
いにかんたんです。とうのつる  
で、五メートルから八メートル



ぐらいの長さの、かごを作ります。そのかごの口の方を小さくして、中へいくほど、大きく広くなるようにしておきます。そうして、へびの大すきなもの、その中に入れておくのです。へびは、そんなしかけがあるとは少しも知らないから、すきなえさに目がくれて、長いからだをうねらせながらかごの中にはいり、えさに飛びかかります。えさをまるのみにしたへびは、おなかが大きくなり、どんなにもがいても、ぜったいにかごから出られないという訳です。おかしを取ろうと思つて、びんの中へ入れた



手が、たくさんおかしをにぎりすぎて、びんから出なくなつたのとよく似ていますね。

(二) いろいろな動物

わに

みなさんは動物園でわにを見たことがあるでしょう。わには口がどがついていて、こわい顔をしています。わにをかつた人の話では、わにはたいへん人なつっこい動物だそうです。えさをやってかわいがつてやるとたいへんなついて、その人



の声はよく聞き分けるそうです。目と耳とがよく発達していて、もの覚えもなかなかよいそうです。おとなしくて正直な性質ですから、なればその人を、喜んでせなかへ乗せたりするそうです。しかし、いたずらをしたりすると、目をたちまちまるくし、ぶうつ、ぶうつと、あらい息をふきかけてきます。わには動物の肉ならなんでも食べます。いわしが何よりのこう物ですが、そうたくさ



んは食べません。たくさん食べた時は、一週間ぐらい何も食べずに、じっとしていることがあるそうです。

だちょう

みなさんは、だちょうの鳴き声を聞いたことがありますか。だちょうをかつている人の話では、ウーウ、ウーウと、もうじゅうのような声で鳴くそうです。何しろあの大きなからだです。その鳴き声も大きく、そばのガラス戸がびりびりするほどだそうです。だちょうは大きなからだをしているくせに、犬のおくびょうもので、よくびっくりするそうです。おとなしいので、なれば車をひいたり、せなかに子供を乗

せたりして遊ぶそう  
です。しかし、見な  
れない人が来ると、  
くちばしでぼうしを  
取ったり、めがねを  
取ったり、なかなか  
いたずらもするそうです。

くろしようにう

みなさんは、いろいろの動物のうちで、さるが一番ちえの  
あることを知っているでしょう。そのさるのうちでは、くろ



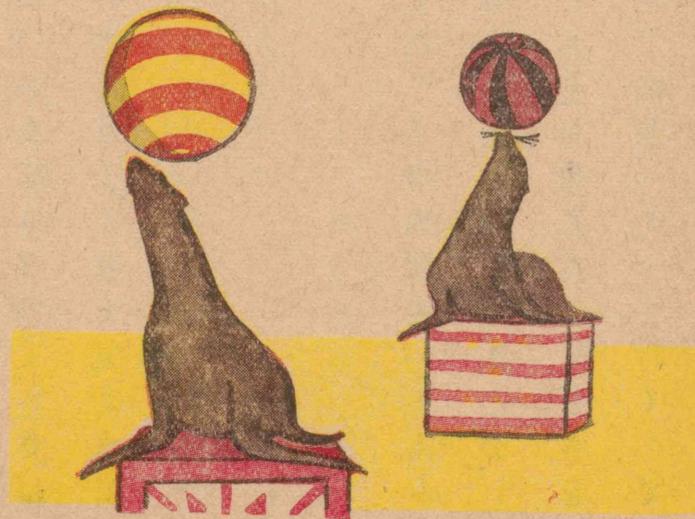
しようにうというのが、一番ちえがあります。人間ほどに  
はちえがありませんが、それでも、かいならしているいろいろ教  
えてやると、自転車に乗った  
り、たばこをすったり、コー  
ヒーをお客さんに出したり、  
オルガンをひいたりします。  
ねる前には、そこらにちらか  
っているものをかたづけたり  
します。みんな、人間のまねをするのですが、さるでもなか  
なかえらいてはありませんか。

おっとせい

動物園でならされた動物は、芸を教えてやるといろいろなことをします。象はたるをころがしたり、しろくまはぶらんこに乗ったりすべり台をすべったり、とらは火の輪を飛びくぐったり、ライオンは人の子供をせなかに乗せて歩いたりします。しかしそのうちでも、生まれながらに芸がじょうずなのはおっとせいです。おっとせいは芸を教えられる前から、もう自分で芸がしたくてしたくてならない、といったようすです。

おっとせいにえさの魚をあたえると、ぼいと、その魚を上

にほうり上げておいて、あのとがった口で受けて食べたり、なかまのおっとせいが水の中へ飛びこむのを見て、喜んで手をたたいたり、なかなかのいたずらっ子です。一匹きのおっとせいに玉をつかませると、ほかのおっとせいもつかみたがって、だだをこねるといいうぐあいです。競争をしたがる、この気持を利用して芸を教えこむのですが、こうして、芸を教えられたおっとせいのすぐれたものは、おさえる場所を教えて



もらいさえすれば、どんな歌でもオルガンでひくことができ  
ます。

おっとせいはさばとにしんどがたいへんすきなので、さば  
やにしんをあたえて喜ばせると、いつそうよく芸を覚えると  
いうことです。

### 犬

あるおばさんが犬をかっていました。その犬はたいへんか  
しこくて、よくおばさんの使いに行きました。おばさんが、  
牛肉をいくらほしいと書いた手紙とお金を包んだふろしきを、  
犬の首に結んでやると、犬は大喜びで肉屋へ走って行くので  
した。

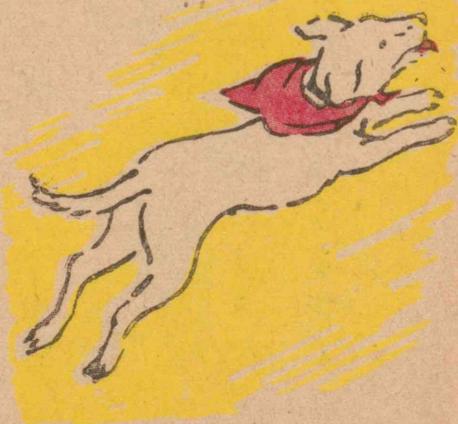
ある日、おばさんはいつものように、犬の首にふろしきを  
結んで、牛肉を買いにやりました。おばさんはその日、八十  
キロもはなれた町へひっこして行くので、目の回るような  
そがしさでした。荷物をかたづけていると、次から次へと、  
いろいろな人がたずねて来て、少しもおちついていられませ  
ん。そのうちに、たのんでおいたトラックが来ました。荷物  
をすっかり乗せると、おばさんもトラックに乗って出かけま  
した。おばさんはあわてていたので、犬を使いに出したこと  
をすっかりわすれていたのです。

おばさんはひっこし先の家に着いてから、犬のことを思い



出しました。心配になってさかしに行きましたが、犬は見つかりませんでした。するとどうでしょう。ひっこしてから五日目に、その犬が新しい家に見せたではありませんか。すっかりやせおとろえて、今にもたおれそうです。それでもうれしそうにおをふっていました。見れば首には、使いに出した時のふるしきをちゃんと付けています。ふるしきの中には、おばさんのたのんだだけの牛肉がはいつていました。牛肉はもうくさってしまいました。こんなにお

なかがすいていても、主人にたのまれた牛肉は食べなかつたのです。おばさんはなみだがこみ上げて来ました。こんなかわいい、やさしい犬を置きわすれて来るなんて、なんというかわいそうなことをしたのだらうと、おばさんは心からおわびを言いながら、食物をたくさんあたえました。八十キ口もある遠いところを、五日間、何も食べずに、あちらこちらさがしながら、おばさんのあとをしたって来たのです。なんとかかわいい、りこうな犬ではありませんか。



## ハ ビノチオ

これはイタリアの、コルローディという人の書いたお話です。たいへんおもしろいので、世界じゅうの子供に親しまれています。

むかし、むかし……

大工のアントニオじいさんの店の土間に、一本のまきがころがっていました。アントニオじいさんは、ちょうどつくえの足を作ろうと思っていたので、

「これはいい。これで作ってやろう。」

そう思い付いて、皮をはぎ、おのをふりあげてわろうとすると、

「あんまり力を入れてぶつ

ちやいやだよ。」

と言う声が聞えました。アントニオじいさんはびっくりして、あたりをきよろきよろ見回しました。テーブルの下をのぞいたり、戸だ

なの中まであけてみましたが、だれもいません。



「わしの気のせいだ。」

アントニオじいさんはそう思って、またおのを手にすると、カいっばいふりおろしました。

「ああ、いたい。」

と、こんどはさつきよりもはっきりと、人間のさけび声が聞えました。

おじいさんは、こしのぬけるほどびっくりしてしまいました。た。

「このまきがなき声をあげたのかな。そんなばかな話があるものか。」

そう思って、おじいさんはまきにかんなをかけました。す

ると、

「よしてよ、くすぐったい。」

と言う声が聞えました。アントニオじいさんはびっくりして、思わずしりもちをついてしまいました。

その時、トントンと、表の戸をたたく音が聞えました。

はいつて来たのはゼットじいさんでした。

「こんにちは、アントニオ。実はお願いがあつて来たんだがね。」

「なんだい。」

アントニオじいさんは立ち上がりながら聞き返しました。「けさいいことを考えたんだ。木ぎれでね、あやつり人形を



作って、それにおどりをさせたり、しばいをさせたりして、世界じゅうを回って歩こうと思うのだ。そこで、あやつり人形を作る木ぎれをもらいに来たんだ。」

「そうか、そんなことはお安  
いご用だ。」  
アントニオじいさんはさっ  
きのまきを取り上げて、ゼベ  
ットじいさんにわたしました。

「じゃ、これをもらっていくよ。」

「ああ、いいとも。」

ゼベットじいさんは何度もお礼を言っ  
て、帰って行きました。

ゼベットじいさんは、たいへん貧しい  
くらしをしていました。いすもテ  
ーブルも、今にもこわれそう  
な、そまつな物ばかりでし  
た。

ゼベットじいさんはがたがたのい  
すにこしをおろし、さっ  
きのまきをひぎの上に置いて、  
人形を作り始めました。

「そうだ、名前があるな。なんと  
付けよう……」



いさんを見つめています。ゼベツトじいさんは気味が悪くな  
りました。こんどは鼻をこしらえ出しました。  
ところが、その鼻がひとりで、ずんずんのびて行くでは  
ありませんか。切っても切ってもものびて行きます。

「どうしたんだらう、この鼻は。」  
ゼベツトじいさんはふしぎに  
思いながら、こんどは口をほり  
始めました。口がほり上がらな  
いうちに、人形はわらい出しま  
した。  
「なんだ、わらったりして。」

ゼベツトじいさんは  
ひとりごとを言いまし  
た。そして、いろいろ  
な名前を考えました。  
「そうだ。ピノチオが  
いい。」



名前が決まったので、せっせと仕事を続けました。人形の頭  
ができました。かみの毛を作り、額を作り、二つの目をほり  
ました。  
すると、人形の目玉がぐるりと動いて、じっとゼベツトじ



てあとを追いかけてきました。ピノチオは往來をずんずんかけて  
行きました。

「つかまえてくれ、つかまえてくれ。」

木の人形が走って行くのを、ゼベットじいさんがよちよち

追いかけて行きます。そ  
のかっこうがおかしいの  
で、道を歩いている人た  
ちはくすくすわらってい  
ます。けれども、だれも  
つかまえてはくれません。  
ピノチオの足があまり速

ゼベットじいさんが大きな声を出したので、人形はわらう  
のをやめました。ちよつと舌を出しました。ゼベットじい  
さんはそれから、あごと首と、かたとおなかと、うでと手を  
作り上げました。

最後に足を作り始めました。ようやく足ができたので、ゼ  
ベットじいさんは歩くことを教  
えました。

歩くことを覚えたと思うと、

ピノチオは自分かつてに、表へ  
飛び出して行ってしまいました。

ゼベットじいさんは、あわて



いものですから、ゼベツトじいさんは、とうとう、ピノチオのすがたを見失ってしまいました。

せっかく作ったピノチオにげられてしまって、ゼベツトじいさんはどうしてもあきらめられません。あっちこっち、むちゆうでさがし回りました。

ピノチオは遠くへ来てしまったことに気が付くと、急にさびしくなって、いちもくさんに家にかけもどりました。どっかりゆかの上にこしをおろして、何をしようかと考えました。するとこの時、どこからか、

「コロコロ、コロコロ。」

という鳴き声が聞えてきました。

「おや、だれだい。ぼくをよぶのは。」

「わたしですよ。」

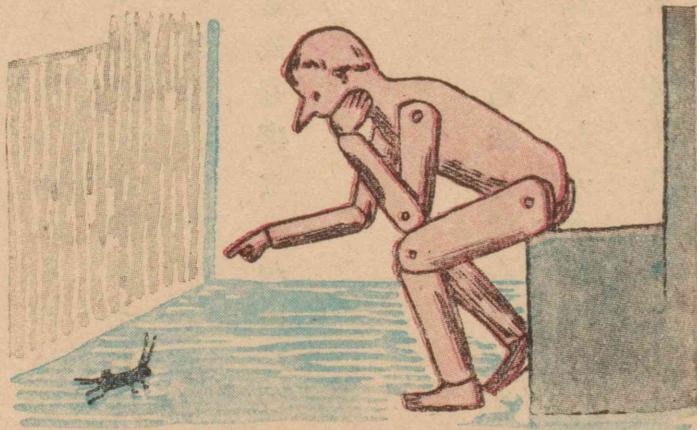
声のする方を見ると、一びきのこおろぎがかべに止まっています。

「なんだい、君は。」

「わたしはこおろぎです。この家に、百年以上も住んでいます。」

「そうか。けれどもここはぼくの家だよ。うるさいからさっさと出て行ってくれたまえ。」

「はい、はい、出て行きますとも。ですが、出て行く前に、



一つ言いたいことがあります。

「それなら、言いたいだけ言つて、さっさと出て行つてくれ  
たまえ。」

「では言いますがね、親の言うことをきかないような子供に  
は、ろくなことがありませんよ。」

「いいよ。ぼくはあしたになったら、こんな家なんか出て行  
くんだからね。」

ピノチオはえらそうに言いました。

「こんな所にいたら、学校へ行かされて、勉強しなくてはな  
らないではないか。ぼくは学校の勉強なんか大きらいなん  
だ。そんなことをするより、毎日木登りをして、鳥のすを

取ったり、ちようちよを追いかけたりして遊ぶ方がすきな  
んだ。」

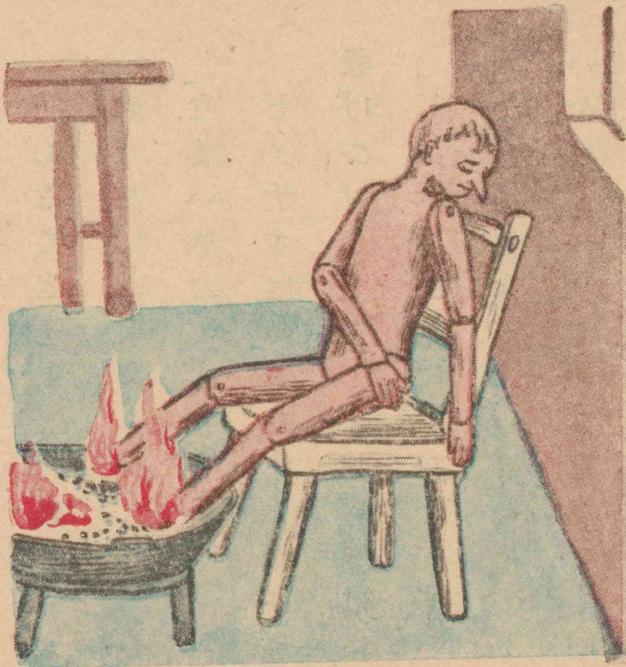
「そんなことをしていたら、大きくなつてから人にばかにさ  
れますよ。」

「なまいきなことを言うな。」

ピノチオはいきなり、仕事台の上にあつた木づちを取つて  
投げつけました。こおろぎはにげて行きました。

ピノチオは急におなががすいてきました。考えてみると、  
朝から何も食べていません。ピノチオは、何か食べる物はな  
いかと、へやじゆうをさがし回りました。戸だなをあけても、  
引き出しをかき回しても、パンのかけら一つありません。

ピノチオはなき出しました。



「おとうさんがいてくれた  
らなあ。」

いくらなくても、ゼベツ  
トじいさんは帰って来ませ  
ん。ピノチオはなきつかれ  
て、こわれたいすにこしを  
おろしました。まっかに炭  
がもえている火ばちの上に、

両足を乗せて、そのままねむってしまった。

ねむっているうちに、ピノチオの両足に火が付きました。

それでもピノチオは何も知らないで、ぐっすりねむっていま  
した。そのうちに、どうどう両足は炭のように焼けこげて、  
はいになってしまいました。

明け方、表の戸をトントンとたたたく音がします。ピノチオ  
は目をさまして、

「だれ。」

と言いました。

「おまえは帰っていたね。わした。」

ゼベツトじいさんの声です。

うれしい、おとうさんだ。ピノチオは戸をあけに行こうと  
しました。立ち上がるうとしたピノチオは、ばったりゆかに

たおれてしまいました。

「あけてくれ。」

表ではゼベットじいさんが、どなりながら戸をたたいています。

「おとうさん、だめなのです。」

ピノチオはなき声をあげました。

「どうしてだめなんだ。」

「ぼく、足がだめなんです。」

「足をどうしたのだ。早く、あける。あける。」

「立てないんです、おとうさん。」

ゼベットじいさんは、まどをこじあけて飛びこんで来まし

た。ピノチオはゆかにころがっています。両足がありません。

ゼベットじいさんは、

「ピノチオ、どうしたのだ。」

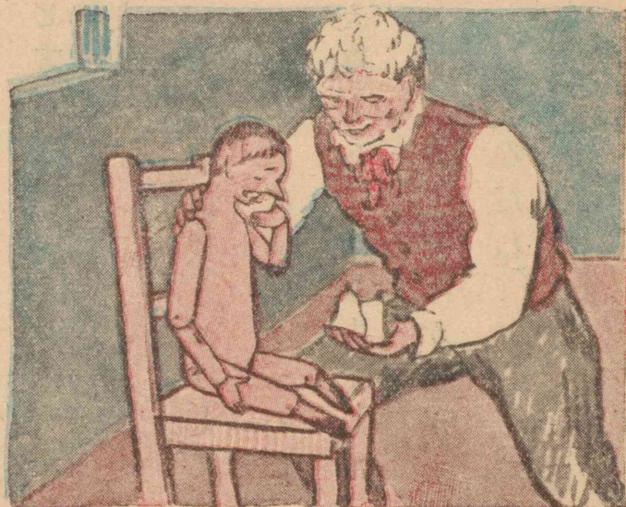
と言いながら、ピノチオをだいて、なでたりさすったりしました。

「ピノチオや、どうして足を焼いてしまったの。」

ピノチオはゆうべのことをすっかり話しました。そして、大声をたててなきました。

「そうか、そうか、かわいそうに。おまえ、おなかかすいているのだね。」

「ええ、ぼく、死にそうならいおなかかすいているのです。」



「それでは、このなしをおまえにやろう。わしの朝ごはんに取っておいたのだが。」  
ゼベットじいさんはポケットから、なしを三つ取り出しました。  
「それなら、皮をむいてちょうだい。」

「えっ、何、ぜいたくなことを言うやつだ。くだものは皮ごと食べるのだ。」

「でも、皮をむかないくだものなんか、ぼくは食べませんよ。」  
ゼベットじいさんは仕方なしに、なしの皮をむいてテーブル

の上の上に置きました。するとピノチオは、たちまち一つのなしを食べてしまって、しんをすてようと思いました。

「おまえ、なしのしんをすてるのかい。そんなぜいたくなまねをするものではないよ。物をそまつにするところくなことはないよ。」

ピノチオは、ゼベットじいさんの言うことを聞きませんでした。そして、あとの二つもたちまち食べてしまいました。

「もう何も無いの。」

「もう何も無いさ。あるのはなしのしんだけだ。」

「それなら仕方がない。一つだけしんを食べよう。」

ピノチオはしんを一つ食べました。おなかがすいているの

で、しんでもおいしいのです。

「もう一つ食べよう。」

また一つ食べました。

「これも食べよう。」

どうとう、ピノチオはなしのしんを三つとも食べてしまい、皮も食べてしまいました。

「そうれごらん。すききらいをするものではないよ。わかつたね。」

と、ゼベツトじいさんは言いました。

「ぼく、足がほしいな。」

ピノチオはおなががいっぱいになると、ゼベツトじいさんにたのみました。ゼベツトじいさんはだまっています。せっかく足を作ったやっても、また家を飛び出されたらこまるからです。

ゼベツトじいさんが足を作ってくれようとしないので、ピノチオはないてたのみました。

「おまえに足を作ったやったら、またにげ出すに決まっています。」

ゼベツトじいさんは言いました。

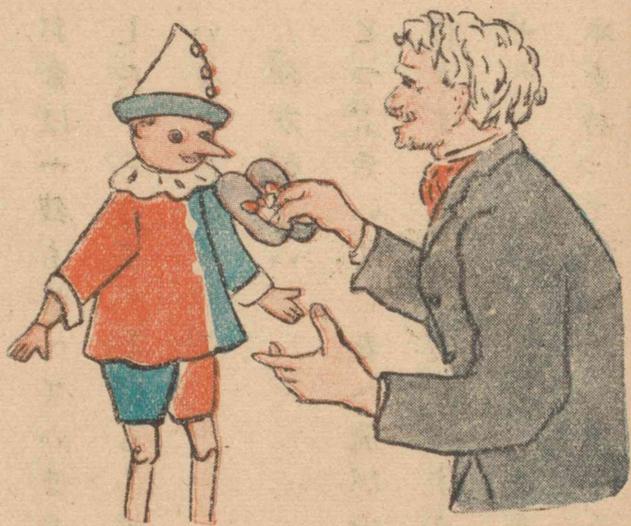
「いいえ、決してそんなことはしません。これからぼく、よい子になりますから、足を作ってください。」

ゼベツトじいさんは、ピノチオが  
いつしょうけんめいたのんだので、  
かわいそうになりました。

「そうかい。それでは作ってやろう。  
きつとよい子になるのだよ。」

ゼベツトじいさんはそう言いなが  
ら、木ぎれを取ってかんなをかけ始  
めました。一時間もたたないうちに、  
前よりもりっぱな足が二本でき上が  
りました。そこで、さっそくピノチオに付けてやりました。

足ができる、と、ピノチオは大喜びで、へやじゆうを飛んだ



りはねたりしました。

「ぼく、よい子になります。学校  
へ行かせてください。」

「それはいい。さっそく行くよう  
にきなさい。」

「だけど、学校に行くには、服や  
ぼうしがいります。」

「そうだったね。」

と言いましたが、ゼベツトじいさんは貧しいので、買ってや  
る訳にはいきません。そこで、色紙で服を作り、木の皮でく  
つをこしらえ、かんなくずでぼうしを作りました。

「おとうさん、教科書もいりま  
すよ。」

しかし、ゼベットじいさんは、  
お金は一銭も持っていませんで  
した。そこで、しばらく考えて  
いましたが、

「仕方がない。」

とつぶやいて、表へ飛び出して  
行きました。しばらくすると、  
ゼベットじいさんは、一年生の  
本を持って帰って来ました。



ゼベットじいさんはシャツ一  
まいでふるえています。

「おとうさん、うわぎをどうし  
たの。」

「売ったよ。」

「どうして売ったの。」

「暑いからさ。」

おとうさんは、この寒いのにうわぎを売って、自分のため  
に本を買ってくれたのだと思うと、ピノチオはむねがいつば  
いになりました。



舌	張	賀	悪	兄	対	路	唱	戦	詩	競
(132)	(110)	(94)	(82)	(72)	(57)	(50)	(31)	(25)	(19)	(4)
最	固	印	比	英	過	望	株	放	各	旗
(132)	(111)	(95)	(86)	(72)	(57)	(51)	(34)	(26)	(19)	(4)
往	似	刷	型	季	務	関	観	熱	賛	応
(133)	(113)	(95)	(86)	(72)	(61)	(51)	(35)	(26)	(19)	(5)
失	覚	逆	館	節	蔵	殺	察	章	成	等
(134)	(114)	(95)	(87)	(72)	(62)	(53)	(35)	(27)	(20)	(6)
焼	直	区	付	省	油	増	類	局	序	争
(139)	(114)	(104)	(87)	(73)	(64)	(54)	(36)	(27)	(20)	(6)
科	性	象	福	造	説	勝	努	講	芸	私
(143)	(114)	(105)	(90)	(73)	(64)	(55)	(38)	(30)	(23)	(7)
銭	犬	群	防	勇	士	点	栄	準	質	届
(148)	(120)	(106)	(90)	(74)	(65)	(55)	(39)	(30)	(23)	(7)
暑	包	断	湯	清	展	信	修	備	問	列
(149)	(120)	(106)	(90)	(76)	(67)	(55)	(39)	(30)	(23)	(9)
寒	願	置	調	初	倍	停	兼	従	号	円
(149)	(127)	(107)	(91)	(77)	(69)	(56)	(39)	(30)	(24)	(10)
疑	貧	訳	整	悲	俵	輪	純	研	内	曲
(150)	(129)	(107)	(91)	(77)	(70)	(56)	(39)	(31)	(24)	(10)
恩	額	差	係	破	万	燃	均	究	職	貸
(150)	(130)	(109)	(91)	(78)	(70)	(56)	(44)	(31)	(25)	(13)
味	迷	階	積	完	敬	貸	独	員	店	
(131)	(110)	(91)	(81)	(72)	(57)	(45)	(31)	(25)	(13)	



このようにして、ゼベットじいさんのおかげで、ピノチオは学校に通うことになりました。このままでいけば、めでたし、めでたしだったのですが、いたずらさきで、その上、生まれつき人を疑うことを知らないピノチオは、これからのいろいろの目に会います。けれども、正直で元気なピノチオは、これに負けないで、おしまいはほんとうによい子になり、ゼベットじいさんにも恩返しをしました。

## 勉強の手引

### 一 運動会

#### (一) 百メートル競走

- (1) あなたの学校の運動会はもうすみすみましたか。運動会の時のようすを話し合ってみましょう。
- (2) この文を書いた人は、百メートル競走の始まる前にどんな気持ちでいましたか。本を読んてちようめんに書いてみましょう。

- (3) 「しっかり」ということばを使って短い文を書いてみましょう。

- (4) 本をよく読んでから、本を見ないで、次の□の中に字を入れましょう。

わねが□□□する。

□□□ボールへ□□こんだ。

#### (二) すずわり

- (1) 「すずわり」の文はどんなところが、おもしろかったか。話し合ってみましょう。
- (2) 次の文に、「組」ということばを二つ書きたしてみましょう。

赤組は白のすずを、白組は赤のすずをめぐけてかけ出した。

- (3) 書き方のけいこをしましょう。

こまかい色紙。　　うれしい顔。

遠くへ飛ぶ。　　楽しい気持。

#### (三) ダンス

- (1) 「野ぎく」のダンスをしているようすを、本から書きぬきましょう。

- (2) 次の文の( )中に「白い」「黒い」「スカート」の三つのことばを、それぞれちよう

どよいどころに書き入れましょう。

音楽に合わせて、運動場へ二列にならなではいって来た。( ) (シャツと) (スカ

ート、みんな、おそろいのかっこうをしている。その( ) ( )が、足の動いたび

に、同じようにゆれて、とてもきれいだ。

- (3) 本を見て、本とちがっているところをなおしましょう。

○野ぎくとゆうダンスである。

○何人かづつはなれたりしてをどっている。

- (4) あなたも運動会の作文を書いてみましょう。

### 二 秋の歌

#### (一) 秋

- (1) 「秋」の歌をいくども読んで、本を見なくても言えるようにしましょう。

- (2) 秋が来て、町のどんなところが秋らしくな

ったでしょうか。

- (3) あなたも秋の歌を作ってみましょう。

#### (二) 野を歩けば

- (1) 「野を歩けば」の歌をいくども読んで、本を見なくても言えるようにしましょう。

- (2) この歌を読んで、秋らしい言い方をしているところを、ちようめんに書きましょう。

- (3) この歌を読んで、次のことに答えましょう。

○「秋のおいがする」とは、どんなことでしょうか。

○「花をたおる」とは、どんなことでしょうか。

○どうして、まきょうの花や、おみなえしの花をつんで帰るのでしょうか。

#### 三 学級新聞を作ろう

- (1) 「ひなごり新聞」にはどんな記事がのって

たてしょうか。

- (2) 学級新聞の名前を決める時、「小ばと新聞」という名前に、たくさんの人が、どうして賛成したのか、そのわけをちようめんに書いてみましょう。

- (3) 「小ばと新聞」には、どんな記事がのることになったか、ちようめんに書いてみましょう。

- (4) 「小ばと新聞」ができたので、みんながよろこんでいるところを、本から書きぬいてみましょう。

- (5) 書き方のけいこをしましょう。

学級かへ新聞を発行した。

詩や物語や絵などを発表する。

午後に相談することにした。

進行がかりをしました。

- (1) ありの生活の仕方を観察するのに、どんな

くふうをしたか、ちようめんに図をかくて説明しましょう。

- (2) あなたはありの研究を読んでどんなことを感じましたか。ちようめんに書いてみましょう。

- (3) 書き方のけいこをしましょう。

ありの研究。ありの生活。観察してみる。同じ種類のもの。根気よくくり返す。努力してげ道を作る。感心しました。

### (三) コップ遊び

- (1) 本に書いてある「コップ遊び」をしてみましよう。どのコップ遊びがおもしろかったか、遊んだようすをちようめんに書いてみましょう。

- (2) 「コップ遊び」のげきをみんなで作ってみま

相談の順序を決めてもらった。

伝書ばとは遠くへたよりを運ぶ。

学芸会。質問らん。

職員室の前へ行きました。

校内野球リーグ戦。図画を選ぶ仕事。

放送局の見学。

- (6) みなさんも学級新聞を作ってみましょう。

### 四 学芸会の日

- (一) リこいなやくそく

- (1) ハンスとあくまは、畑の作物を分けるのに、一番はじめはどんなやくそくをしましたか。

- (2) 二回めはどんなやくそくをしましたか。そして二回めには何をまいたてしょうか。

- (3) ちえのあったのはハンスでしょうか、あくまでしょうか。どうしてそれがわかりますか。

- (二) ありの研究

しょう。

### 五 汽車

- (一) 鉄の馬

- (1) スチアンソンの作った機関車はどんな形だったてしょうか。

- (2) スチアンソンの鉄の馬がはじめて走った時のようすを、ちようめんに書いてみましょう。

- (3) グーバーの機関車はどうして馬車に負けたてしょうか。

- (4) 「鉄の馬」を読んで感じたことを話し合ってみましょう。

- (5) 次のことばを使って短い文を書いてみましょう。

○望みをかなえた。

○運わるく。

○こっけいなこと。

(6) 書き方のけいこをしましょう。

汽車の発明。鉄道馬車。じょう汽機関を使う。合図の旗で走り出す。ぐんぐん速力を増していく。決勝点に飛びこむ。機械を改良する。発車の時や停車の時こまる。燃料や水がたりなくなる。牧場。

(二) 駅長さんの話

- (1) 貨車にはどんなのがあるか、本を見てちょうめんに書いてみましょう。
- (2) 客車にはどんなのがあるか、本を見てちょうめんに書いてみましょう。
- (3) 次の人たちは、どんな仕事をする人でしょうか。

駅長さん。 改さつの駅員さん。

機関士さん。 車しょうさん。

(4) 「駅長さんの話」を読んで感心したことを話

し合ってみましょう。

(5) 次のことばを使って短い文を書いてみましょう。

地ひびきをたてて。 すさまじい音。

むれないように。 せいぜい。

(6) 書き方のけいこをしましょう。

貨物列車が通る。急行列車が通り過ぎる。駅長さんの事務室。機関士さんが汽を鳴らした。荷馬車では五十俵ぐらいいしか運べない。

六 放送を聞く

(一) 子牛(放送げき)

- (1) この放送げきの台本を読んで感じたことを、みんなていろいろ話し合ってみましょう。
- (2) 完一は弟の英次がやくそくどおり来ないので、どんな気持ちになりましたか。ちょうめんに書いてみましょう。

(3) 完一は英次から子牛のくろの話を聞いて、

どんな気持ちになりましたか。できるだけくわ

しくちょうめんに書いてみましょう。

(4) あなたがたも、このげきを放送するつもりで練習してみましょう。

(二) 放送局の見学

(1) 第一スタジオを見学して、どんなことにおどろいたのでしょうか。

(2) 放送局にかんけいの深いことばを本からさがして、ちょうめんに書きましょう。

(三) ことばの音

(1) 「カキクケコ」の五つの音をいろいろに組み合わせさせて、ことばを作ってみましょう。ことばがいくつできましたか。

(2) 次のことばをちょうめんに書いてみましょう。

○二つの音でできていることば。

○三つの音でできていることば。

○四つの音でできていることば。

(3) 本に出ているいろいろの音を正しく言えるように練習しましょう。

七 動物の話

(一) 動物をつかまえる話

(1) 「象」と「きりん」「へび」のつかまえる方が書いてありますね。あなたは、どのつかまえる方がおもしろいと思いましたか。どうしてそのように思いましたか。

(2) 「迷路」とはどういうものでしょうか。

(3) 次のことばを使って短い文を書いてみましょう。

○思うぞんぶん

○あらかじめ

○大ニテ物

(二) いろいろな動物

- (1) 「わに」、「たちょう」、「くろしょうじょう」、「おっとせい」の話を読んで、どれがおもしろいと思いましたか。話し合ってみましょう。
- (2) 「犬」の文を読んでなみだがてるようなところがありませんね。あなたはどこに感心しましたか。話し合ってみましょう。
- (3) 「いろいろな動物」を読んで感じたことを作文に書いてみましょう。

ハ ビノチオ

- (1) ゼベットのいさんが、人形を作りながら、「気味が悪くなった」のは、どんな時ですか。「ふしぎ」に思ったのはどんな時ですか。人形を作ってから、どんな時あわてましたか。
- (2) ビノチオはこおるぎにどんなことを教えら

れましたか。

- (3) ビノチオがなしを食べたところを読んで、あなたはどんなことを思いましたか。
- (4) ゼベットのいさんが、ビノチオに本を買ってやるためにうわぎを売りましたね。そして、ゼベットのいさんは、「暑いからさ。」と言いました。あなたはここを読んでゼベットのいさんを、どんな人と思いましたか。あなたが思ったことを話し合ってみましょう。
- (5) 「ビノチオ」の文を読んで、あなたはどんなことを考えましたか。考えたことをちょうめに書いてみましょう。

編集にたずさわった人

監修者 学士院会員 柳田国男  
 芸術院会員 岩井良雄  
 編集委員 東京教育大学教授 岩淵悦太郎  
 国立国語研究所員 大藤時彦  
 民俗学研究所理事 上飯坂好実  
 東京杉並第四小学校校長 鳥山榛名  
 山梨大学教授 橋本芳一郎  
 東京学芸大学助教授 望月久貴  
 東京学芸大学助教授 望月久貴  
 東京書籍株式会社編集部

さしえ及び装てい

齋藤長三

新しい国語 四年下

(小) 第四学年後期用 小国四一六

昭和二十六年五月一日  
昭和二十六年六月一日  
(昭和二十五年八月十二日 文部省検定済)

印刷 発行 定価 円

Approved by Ministry of Education (Date)

著作者 東京書籍株式会社編集部 代表者 藤田貞次  
 発行者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社 代表者 山田三郎太  
 印刷者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式会社 代表者 山田三郎太

発行所 東京書籍株式会社

(出版権の設定登録及び表紙の意匠、装てい登録中)



庫  
50  
758

広島大学図書

0130449758



東京書籍株式会社